婦人之友

第二卷
第六號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戯、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書振假名附のこと。

一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。

一、原稿は、一切返附せざること。

一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。

一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。

一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行	毎月一回五日發行○第一卷第一號明治廿四年一月二十日發行
定價	一册金拾錢○六册前金五拾七錢○拾貳册前金壹圓拾錢○郵稅各一册一錢○切手代用は壹割增但壹錢切手に限る。
入會者	は會則御承知の上にて東京女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會あて申し込まれば雜誌は無代價にて送呈すべし
讀購者	は總べて前金にて東京日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂へ御注文のこと○送金は神田今川橋又は日本橋室町郵便取扱所受取人金昌堂あてのこと○見本は切手二錢に限る十二枚封入にて申し越されたし○前金相切れ候節は赤にて●印を御姓名の上に附し候に付き早速御送附下されたく御入用なき時は御斷り下されたく候○轉居の節は新舊共に御通知を乞ふ
編輯	に關する御照會及原稿御寄贈はすべてフレーベル會あてのこと
廣告料	一頁十圓半頁五圓

明治三十五年六月二日印刷
同　年六月五日發行

不許複製

發行兼編輯者　東京市本郷區元町二丁目六十六番地　江崎政芳
印刷者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　日下主計
印刷所　東京市神田區錦町三丁目二十五番地　熊口活版所
發行所　女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會
發賣所　東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地　金昌堂

大賣捌所　東京東京堂●同東海信文合資會社●同北隆館

婦人と子ども第二卷第六號目次

子ども

樂隊の大勝利（やまとの翁）小蝶物語（野口雨情）二人の兄弟（矢橋小葩）笑ひ草、一口話、謎々懸賞考へ物

家庭

家庭雜感……廣瀨權太郎
傳染病……長瀨復三郎
今昔いろは料理……石井泰次郎
小さき日記……印東音鳴

學術

鐵道の話……菊亭
夢のはなし……東基吉

史傳

津崎矩子……下村三四吉

文苑

偶作六首……佐々木信綱
馬二十五首……竹柏會兼題
雜詠三首……いく子
仝……鷺水子
春の歌三首……敏子
蝶……東くめ子
言はず語らず春の日の花の袂……野口雨情をつね

說林

動物愛憐と教育……本多增次郎

寄書

子供の正直……相摸平岩繁治
梅ちやんの日誌……三河鈴木かなへ
備後の輓歌、子守歌……備後佐藤生子
肥後の手毬歌……合志章子

雜錄

六月（みな月）……せ、く生て
米國に於ける我二人の女學生……やす
結婚論……野本生
寡婦と愛子……一二三譯
鐘撞の轍……秩父生

彙報

雲の上●學事集會●筆の雫●東京より●地方通信●會報

婦人と子ども　第貳卷第六號　（明治三十五年六月五日發行）

（本欄は凡て轉載を禁ず）

樂隊の大勝利（つゞき）

やまとの翁

さても、驢馬と犬と猫と鷄と、四人づれで、又森を出て遠い火を目的に歩き出しましたが、近くなるに從い、だん〳〵其火が明るくなって、側え行って見た所が、これは此あたりの山賊の住家でした。

そこで、一番背の高い驢馬が、そーっと窓の際え這って行って中をのぞきました。すると下から鷄が、

『何か見えますか、驢馬さん』

驢『さよー、眞中に、甘そーな御馳走を澤山并べて周圍に山賊どもが大勢お酒を飲んでいるな』

鷄『へゝー、じやー、今に吾々も御馳走になれますね』

驢『そーさ、どーかしてあの座敷え行きたいもんだな』

それから、此四人が窓の下で、ひそ〳〵と相談を

して、どーにかして　あの山賊どもを、追い出そーとゆー工夫を凝らした。どーしよー、こーしよーと考えた後、とー〳〵其計を考へ出した。先づ驢馬が前脚二本で、窓の椽え乘っかゝると　狩犬が其脊中の上に乘る、次に猫が犬の上に　かき上ると　其次に鷄が猫の頭の上え、飛び上って　留る、さてこーゆー具合に出來た所で、一二三の合圖で　皆が一度に樂隊の合奏を始めた。

『ウーン、ヒヽンヒン〳〵』犬『ウーワン、ワン〳〵』

猫『ニヤチー　ニヤチー』鷄『コ二ッケッコー〳〵』

何とも分らぬ、不思儀な恐ろしい大きな聲で一度に

やったもん
だから、さ
ー山賊共わ、吃驚
仰天した。『そーら
化物だ』と思って腰
をぬかすやら、御馳走を引っくり返すやらの大騒ぎで

皆んな散々になって、森の方え逃げて行ってしまった。

さー甘く行ったとゆーので、四人わ、中に這入って　たらふく御馳走になって舌鼓をならして居る。

さて御食事が濟むと、燈火を消してしまって、皆が眠ょーとゆーことになって、各自、持前の寢所に付いた。即、驢馬わ、そこいらの藁の上に横になる、犬は戸の後に、猫わおへっついの側の溫い所に、そして鷄わお座敷の中央の鴨居の上え飛び上った。朝から、もー大分草勞れたもんですから、四人とも直

ぐ寝入って仕舞いました。

さて、夜中頃になると、先きに逃げて行った山賊どもわ、大勢で又どや〳〵と歸ってきました。所が家わ眞暗で、寂して居る。そこで山賊の大將がゆーにわ『さっき、あんなに大騒をして、狼狽るでもなかったのじゃ』すると皆が、『さよー〳〵何もありやしないんだ』といって居る。それで其中の一人が、先づ念の爲にとゆーので、家の中を見廻りに行って見ると、家中丸で寂して居るから、燈火を附けよーと思って、勝手の方え行くと、へっついの下に、ピカ

ーリ〳〵と猫の目玉が二つ光って居る、山賊は夫とは知らないから、之を消え殘りの炭だと思って、火を附ける積りでマッチを其目玉えくっ付けた、猫も之にわ驚いたです。目の玉えいきなりマッチをつきつけられたもんだから、恐ろしく吃驚して其山賊の顏え不意に飛びかゝって、爪で以て散々に引っ掻いた。

眞闇の中で、此不意打に出遭ったもんですから、山賊わ又腰をぬかさん許りに吃驚して狼狽ふためいて戸口の處え逃げて吳ると、そこに寢て居った犬の尾を思入り履み附けたから堪りません、犬わ、

『ウーワッ』と言って賊の足え噛み附いた。賊わもー泣き出しそーになって　跛引きながら　藁の處まで來ると　今度わ驢馬が、驚いて後脚でイヤとゆー程賊の脇腹を蹴附けました。すると此騒ぎで、今迄鴨居の上に寢て居った鷄が、目を醒ましていきなり『コッケッコーコッケッコー〈〈』と鳴き出しました。

賊わ這々の体で逃げ出して歸ると、大將わ待ち兼ねて、『こりや　中わどーだった』と尋ねます、すると賊わ、

『どーの、こーのって親分、家内にわ大變なものが住

んで居ますよ　まーこーです、私がね、勝手え行って火を附けかゝった所が、恐ろしい尖った爪で、突然私の顔を、此通り引き搔いたんです、私も吃驚して戸の處に逃げ出した所が、其處にわ又人が居まして、『ウンコラ』といって、出刃庖丁を、私の足に突き込んだ、それから、庭に來るとどーでしょー、何者かゞ太い棍棒を以て、イヤとゆー程、私の横腹を喰わせましたね、それからまだ恐かったのわ何でも屋根の上でしたろー　大きなお化の聲がして、『とって　食をーか　とって　食をーか』と怒鳴り出し

ました、いや恐いの恐くないのって、生れてから始めてこんな目に遭った』

丸で顔の色もなくなって　慄え聲で咄しましたから他の者共も一度に慄に上って仕舞って、夫から、此山賊どもわ、もー二度と此家にわ來ない樣になったもんですから、とう〳〵四人の樂隊わ、甘々と山賊の住家を奪い取って　何時までも安樂に此處に住うことになりましたとさ。めでたし〳〵

小蝶物語

野口雨情

◉京ちやんの卷

翼を傷めました蝶々が一疋。お庭の隅の薔薇の花片の上に宿つて一夜を明しました、その次の日のことでした。

京ちやんと言ふ。今年七歳になります可愛らしい兒が、平常のやうにお裏のお山へ登つて遊んで居りますと。

『京ちやん京ちやん。』と聞き馴れない小さな聲でもつて、呼びますので京ちやんは屹度吃驚いたしましたのでせう?。清しい眼を眞丸くして矢鱈に四方を見廻しました、が、誰れも四邊に見えませんでした。

京ちやんは、不思議さうに立つた儘、何にか考へて居りましたっけが、漸安心したものと見えまして、再び草の上へ座りました。

さうしますと、又。

『京ちやん、京ちやん。』と續けざまに呼びましたので、今度は急に氣味が惡くなッたのでせう?。京ちやんはサッサとお家へ歸つて參りまして、直その事を姉さまにお話し致しました。

すると。

『そりやア、野狐が京ちやんを誑やうと思つて京ちやんの名を呼んだのですから、もうお山へ登つちや、不可せんよ。』と姉さまに申されましたのでもう〳〵お山なんかへ決して往くもんぢや無いと幼心に京ちやんは思ひました。

で、京ちやんはお山へ登ずに、庭隅の垣根の傍で遊ぶことに斷ました。

丁度、その次の次の夕方です。今日は終日垣根の傍へ小さな莚を敷いて、様々な眞似をして遊び暮らしたので、もうお家へ歸つて行かうと爲ますると。先達日お山で呼んだのと同じ聲で。

『京ちやんもうお歸り？。京ちやん、京ちやん』と言はれましたので。京ちやんは吃驚したの何んのて。

『あら野狐！。』と、驅け出さうとしますると。垣根に咲いて居る薔薇の花の上に小さな蝶々が一疋。

『京ちやん、野狐ぢやありませんよ、小蝶子之助と言ふものですよ。』と言ひ乍ら頻りとお辭儀を仕て居りますので京ちやんは呆れ切つて見て居りまするとと。

『京ちやん！私は先達日の大雨で、こんなに翼を傷めましてね……。』と馴れ〳〵しく翼を伸して見せましたので。

『まあ、本統に翼が破れてること、お前痛みやア仕ないの？。』と氣の毒さうに言ひまするとっ

『にゝ今ぢや痛みも何んにも仕ませんがね、一時は隨分困りましたよ……第一飛ぶことが出來なくなッちまッたのでせう、そんなもんで食物を求すことも何にすることも出來ないんですもの、も少しで餓死て仕舞ふ所を、庭隅に薔薇の花が咲いて居たのを思ひ出しましてね、漸の事で此處まで來て命たけは助かりましたが今でも遠飛びが出來なくて毎日々々倦屈で堪りませんからね貴孃と一所に遊ばせて戴き度いと思ひまして先達日もお山まて貴孃の後を行つたのでしたッけがね……。

『さう、お前だつたの？。』と京ちやんは可哀想に

思ひましたので『私だつて外に私友達はありやしないのよ』と申しますると。

『ぢや、私を遊びお友達にして下さいませんか』と子之助は莞爾々々しながら言ひました。

『だが私前、何時までも私の私友達になつて遊ぶかい。』

『えゝもう、遊ばせてさへ下さるんなら、此のお花の上を御借り申して、茲を私の家ときめましてね、秋風が吹いて私が死んで仕舞いますまで遊びますとも。』

『ぢや明日から二人で遊ぶことにしやう。』と之れから、京ちやんと小蝶子之助は至つて間の好いお友達となつて毎日のやうに面白く遊びましたとさ。

（京ちやんの卷をはり）

二人兄弟

矢橋小葩

いつの頃でしたか、ある所に源一とお鋭といふ二人の、大層心のよくない夫婦がありました。

誰だつて、私父様やお母様は太切でせう。それにこの夫婦は、廣い世界に、たつた一人しかない而かも聾で、足腰のあまり自由でない、老人の私父さんを、それはそれは、むごく取り扱かつて。

まあ、かうなんですの。

通常の人なら、自分等が食べなくつても、おいしいものは、先づ親に上げますのに、この夫婦は反對で、自分等ばかりいつでも御馳走を、食べて私て、このあはれなお祖父さんには、きたないお膳で、かけたお茶腕で、毎日毎日朝も晩も、わづかぽつちな、ご飯と澤庵を二ツ切だけ。それより

外には何も上げないのです。

こんなにされては、ほんとに嫌ですわねえ。それでも、お祖父さまは温順な人ですから、こんな不孝者を子に持ッたのが、自分の因果だ。老いては子に従へといふ諺もあるから。と、かうあきらめて、ですが、心の中では泣いて、その日その日を送ッてをりました。

ある日のことでした。

それは丁度、若葉すゝしい夏のはじめで、色んな夏花が風に薫じて、大層心持ちの好い正午頃。けふは仕事が無いと見えて源一は　新聞を見たりお茶を飲んだりしてゐたが、それにも倦みはてゝしまッて、永い日を退屈まぎれ、お坐敷中をあちこち歩いてをりました。お太陽様の光が、手洗鉢の水に照りかへされて障子にグル〳〵廻ッてる影が、おもしろいので、ボンヤリ立ッて眺めてゐました。

すると、何だかさも愉快さうな話聲が聞えますので、障子をあけて見ますと、自分の子の太一と次男の兄弟が、お茶腕や、廣ぶたや、疱刀などの玩具で、まゝごとして遊んでゐるのです。

で、源一は柱に凭れて見てゐました。

『お前、こんだお祖父さんになるんだぜ』と兄の太一さんが、次男さんに申しました。

『いやだア、いつでも兄さんは、お父さんにばかりなッて、づるいや』とさも不興氣に云ふ。

『だッて、あとで好いもの上るから』

『いやだア』

『だッて、ね？』

『いや、僕、お父さんになるんだッたら』

『ぢやア、いゝや、もうこれから遊んでもやらないし……』

さあ、かう云はれたので次男は堪らない。とうとう兄さまに敗けて、お祖父さんの役目に進々なりました。

まづ腰をまげて、わざとヨボ〳〵とお祖父さまの眞似して、椽側に坐りなほしました。

すると、太一さんは、最等きたならしい茶腕にまづさうなお菓子を、ホンのすこしぽッち入れてわざと、けんどんに、いつもお父様やお母さんのいふやうな聲色で、『祖父さん、さア御飯だよ』と云ッて、次男さんのお祖父さんの前において、そして、自分ばかり佳味さうなお菓子をムシャ〳〵食べてをります。次男さんこそ、本統に好い迷惑だ。まづいのを食べて、兄さんの食べているのを見ていなければなりません。

是を見ていたお父さんの源一は、太一さんにかう尋ねました。

『太一や、それは何の遊びだい？』

ところが　太一さんの答へが面白いではありませんか。

『僕、大きくなッてお父さんのやうになッてからお父さんがお祖父さんにするよう、僕もお父さんにしてあげやうと思ッて、そいで、眞似してるの……』

＊　＊　＊　＊　＊

此の日からといふものは。源一もお鋭も生れかはッたやうに、お祖父さまを大層大切にして、お孝行をつくしましたさうです。（四月九日夜稿）

笑ひ草

和尚さんと子僧

和尚「子僧や、子僧や」　子僧「何か御用で」　和尚「ふー他でもない、ふ前は日頃中々悧口で賢いが、どーだ今和尚のすることに答が出來るか」　子僧「エー何でもやります」　和尚生意氣をいふなと思って、いきなり兩掌をポンと打って　和尚「さー子僧、今鳴ったのは右の掌か左の掌か」　子僧一寸考へて其儘立って、敷居の處へ行つて、敷居を跨げたなりで、子僧「さー和尚さん、私が今此室へ這入るか出るか當てゝご覽」　和尚「アッそりや不可、私が這入るといふと汝は出るに違ない、私が出るといへば汝は這入る積りだろう」　子僧「じやー和尚さんの手を鳴らしたのも其通り、私が右が鳴ったといへば左だと仰やる、左が鳴ったといへば右だと仰やるのでせう」

錢の音で借金拂ひ

これは一人の貧乏人、鰻が大好だけれど買って食べる丈錢がない、仕方がないから毎日夕方になると出かけて行って　鰻屋の店の處に立つて鰻を燒く香を嗅いで來て、夫から御飯を食べる事にして居ました、夫を鰻屋の店の者が見付けて、一番戯ってやらうと思って、三十日の日になつて其人の處へ鰻代を請求に行きました。「此間から恰十日の間、私しの店へ鰻を嗅ぎに御出でたから、鰻代總べて〻五圓御拂い下さい」と申しますと、其人は「へゝー　五圓になりますか、一寸御待ち下さい、今五十錢銀貨で揃へて御拂ひ致しますから」といって、奥へ這入って行って「一枚二枚三枚……九枚十枚」と錢を勘定する音をさせて、夫か

ら出て來て「さー五十錢銀貨十枚御拂ひしました
から、請取を下さいと」いひます。店の者不思議
な顔して「れ錢を勘定する音は聞きましたがまだ
拂って呉れないじやありまんか」「だって私も鰻を
食べないで、たゞ香だけ嗅いだんですから、れ拂
ひも音だけで宜いでせう」

一口ばなし

熊本　合志章子

甲　雷さんはよほどれそろしー者でありますね
乙　なるほどおそろしー
甲　たこの足は八本ありますよ
乙　いかにもさよーで

謎々欄へ

三河　近藤とき子

一、門番人と掛けて
一、楠公父子と掛けて
一、奇麗な座敷と掛けて
一、虚無僧と掛けて

◉懸賞考へもの

先日來皆さんから、澤山考へものが出ましたが今
度は私にも一つ出さして見て下さい（やまとの翁）

(1) 十八を二分して（鳥の名一つ）
(2) 六を二分して（草の名一つ）
(3) 二十四を三分して（家道具の名一つ）
(4) 千〇十を三分して（日本の札所）
(5) 私は大變子供に嗜かれる滋養品で、原籍は外國
です、頭の數と足の數とを合はすと十二になりま

す。倒さに立つと菓物の樹になります!!!

さー　これ皆あてゝごらん!

●皆當てた人三番までに賞品を上げます。

●解答は封書に限る。　封紙には婦人と子ども投稿と記し下さい。

●女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會あてのこと。

前號考へ物の答

有酒、來呑。

家庭雜感

廣瀬權太郎

(一)子供の性質。　幼さ子供は誠に天眞爛熟の、云はゞ無垢の者で、惡い性質は少しも以て居らぬが母親や又は姉妹等が可愛さまぎれに菓子や、乳房等を見せて、さーやろー、早くふいでなどと、見せびらかして置いて其子の手を出すや否や、いやなど申して戯るゝは、誠に、善くない事と思ふ、如何なれば、之れは一の惡い事を敎へて、惡觀念

を拵ゐる樣なものである、このよーな事が折々重れば、重る程惡い觀念が兒童の頭の中に構成されるので或學者は、人の性質は本來善なる者であるけれども、右のよーな例で以て、惡い事を敎えるから、成長するに從て、惡い心が出來るのだと申されましたが、私もそーであろーと思はれます、それでありますから、其よーな事は決してなさらぬのが宜しうございます。

(二)食物を妄りに與にぬ事。　胃病は日本人の持病だと申す事は、外國人の一般に申す事でありますが、此原因も色々ありませうけれども、嬰兒の時に、母親等が、子供を育つるに泣きさえすれば、乳々と申して直に乳を與えるのが一汎の傾きでありますが、之は至極よくない事でございます、子供の泣くのは、決して空腹で泣くのみではなく、氣分が惡いといつて泣き、何か慾しい者が有ては泣き、いやな事が有つても泣くのです、それでありますから、乳等は略一定の時刻をきめておやりなさる方が宜しうございます、又やや大きくなりまして、近所へ遊びに參りましても、直に菓子やらわんもやらを與にるのが、習慣の樣に思はれますが、これは實に改良しなくてはならぬ事と思ふ併し子供の身體には、砂糖分は、必要なものでありますから、適度に與えるのは宜しうございませう。

(三)成るべく自然的に育つる事。　どーも私い見る所では、普通の智識の足りない加減が余り子供の世話をやきすぎて困る、全體子供と云ふ者はなるべく、自然に放任して、天然の良能を發達させるがよい、折角子供の自然に天眞爛熟に活動して居

るのを、消極的に、やれあーしてはいけん、こーしてはいけん、やれおてーせよ、やれ頭を下げろやれれ行儀よく座れ等小杓な世話をやき、特にお客様でも來ると、お行儀が惡い等としかりつけるのは、何の役にも立ちません、只子供は、却て恐れ縮みて、卑屈卑怯の憶病者となるか、但しは又のぶとく癖みて拆檻を空吹く風ときき流すに至ります、又今でも昔の樣に其子をせめ立てて、朝は早く起し、夜はおそく迄寢ねさせず、夜も晝もやれ稽古稽古と責め立つるを、親の役目と思つて居る人が多い樣ですが、精神上から申しても、身体上から申しても、斯る事は善くはございますまい。

(四)普通智識の必要。　母親たる者は是非とも、普通一般の智識を以て居る人を望みます、そーして、特に理科的の智識は必要だと思ひます、母親たる者は成るべく、英雄談やおとぎ噺を知りて居て、まれ〳〵には、子供の話相手となつたり、學校等で聞て來た噺を話させたりして、昔の樣な何の役にも立たぬ迷信的の、お化の話や人情談などは、しない樣にしたいものです、私等が一寸近所の家庭を訪問などして見ると、子供の泣く時に、母親や叔母等が頻りに夫を止めさせよーとして、それ巡査が來たぞ、そらお化が來たなど申て居ます、が、誠に私は片腹痛うございました。

(五)音樂につきて。　音樂はご承知の通り人の感情を左右する事が甚だ大なる者で有りますから感情の教育には、非常な力を以て居る者であります、けれども田舍へ參りますと、祭禮とか、お盆とか申しまする時に、踏をれどりながら、謠ひまする色

〳〵な俗的のものは、稀には善いのも有りますが、中には殆んど口にするも憚る樣なのが澤山ありまして、之もだん〳〵改良しなければならぬと思ひますが、此等の人情歌を大低の日本の家庭に於ては平氣で子女と一所に謠って居るのは、寧ろ驚くべきではありませんか特に母親等が、子供に向つて謠え謠えといつて切りに勸めて居た事も見た事があります、私の考には一汎の家庭に於て以謂學校唱歌の如き者を可成謠ふ樣にして日々時間を定めて家內合唱等も致したならば、一層心身を爽快にし審美的感情を養成し、恰もエデンの園にでも謠ふ樣な心持が致しまして、子供の敎育上に取りましても、又一家の平和團欒の上に於きましても、此上もない善い事と思ひます。

(六)親切といふ事。　終りに望んで今一つ親切と申す事を簡單に申しますが、皆さんは、鼻を垂して居る子供に向て、鼻をかめと云うて自分でかませるのと、又此方から鼻をかんでやるのと、何れが親切だと思ひますか、私は其子供の爲には、鼻をかんでやるのは、却て不親切で、自分で鼻をかませるのが、眞に親切であろーと思います、是れは只一例でござりますが、些細の事でも、子供の爲には、甚だしい影響を及ぼす者であります、から、余程氣をつけねばなりません、親切の積りで世話をやき過ぎることが、却つて後々子供に思はしからぬ性質を與へることになつて、大變な不親切となることが、澤山御座いませう。

傳染病

醫學士　長瀨復三郎

(5) 假痘

之は折り〳〵あります、眞痘に比して發疹少なく全身い症狀もかろく經過も善良です。全身の熱發、食慾の欠損などからはじまりまして、全身に順序なく發疹し直に水ぶくれになり中央くぼみ五六日目より化膿をはじめ、二三週間の内に痂皮を生じて終る。合併症はありません。

(6) 水痘

幼兒のみにある傳染病で、其病毒の原因はまだ分りません。初には通例の病氣のやうに何か徵候があるか、又は全身に順序なく突然豌豆大の紅色の斑點でき、中央に針のさきのやうな水胞でき、追々大きくなり、まはりに紅色を帶び遂に胞中の液も多くなり、水胞は三日目位より褐色になり、八日乃至二週間位より斑痕なくしてなほります。

以上申した發疹性傳染病の内最も注意すべきは麻疹、猩紅熱、天然痘の三です。

(7) 百日咳

爰に呼吸器病であつて傳染し、世人は割合に恐を抱かず爲に餘病に由て多くの子供を倒す病があります、即ち百日咳（痙咳、疫咳）です。之は傳染病の一で、二年乃至六年の子を侵します。喉頭氣管のカタル症狀で、一種特別のせきをします。此病は大人にはありません。又幼兒でも一度かゝれば通例二度とはかゝらぬものです。通例二年以上ですが時には二年以内でもかゝる事があります。もし一年未滿の兒が此病に侵された時には、ジフテリヤ又は腦膜炎のごとく最も恐るべきものです。病原病毒に付ては今日一定した學說がありません。潛伏期は一週間、欠はカタル期で、咳嗽起

り、まだ百日咳であるといふことはしかと分らず、只氣管支カタルの咳嗽よりも多く且つ發作性に出るのです。そうしてせく時には食物をもどします。さて十日から十四日もたてば痙咳期となり幼兒の泣く時、物を嚥下する時、精神感動のあつた時に發作してせきます。其咳嗽の有樣を申しますと、最初に先づ不安の狀を呈し、喉頭に何か刺戟物のあるやうにせきはじめ、呼氣のみ連出し、顏色赤くなり、涙を出し、唇は紫色を帶び、ひどいのは大小便を洩らし所々の粘膜の出血鼻血等を起し、さて三四分の後永き吸氣をなし、漸く安靜になる。かやうな發作が、ひどいのは一晝夜に五十回位通例三十回位又二十回十四回のもあり。かくて發病後だん〳〵日を經るに從て、發作の數少なく且つ輕くなり、八週乃至十週にて治る。即ち

カタル期、痙咳期、輕快期を經るものです。通常全經過の內發熱することはありませんが、時として突然發熱し、又はあまりはげしくせく爲にカタル性肺炎、腦膜炎を起し、又は下痢のつゞいた爲に大に身体衰弱し、遂に結核病を起すことが屢々あります。そうして新鮮な空氣中に居るほど恢復はやく、下等社會の不潔な空氣の處に居るなど恢復がおそく、又合併症もおこりやすい。

一家に此患者あるときには、之に氣が付いて他の健全なる兒を隔離せうと思ふ頃には、もうとくに健全の兒にも傳染してあるいです。さうして幼稚園、小學校、親族、知人等幼兒の交通は傳染の媒となります。東京には二三年以來、終年此患者の絕えたことがありません。之を防ぐには咳嗽のでる兒にはよく注意してはやく健全な兒とはなすやう

に氣をつけるのが大切です。

此病の發作は夜にあるのが多いです。故に晝は少しも變らず遊び、從て大人もさほど心配せず夜になりて發病するものですからよく〳〵氣をつけなければなりません。

今昔いろは料理

石井泰次郎

（た）

今度の四の仕方は昔の仕方を記せる物なり

たけのこの汁拵へかた

竹の子の根と、穗先とを切て、皮をむきさり、切方は好み次第小さくも大きくとも小口切にも、はす切にもして、ざつと油にていためゝ、蕗と燒豆腐とはじき豆などあしらひて、汁にも仕立、又すひものにも仕立るなり、吸口　木のめ。

田にし用ひかた

田螺は、あらひて、煮しめて用ふ、又干大根などつけあはせて、木の目わへにしてよし。

たゝみいはし用ひかた

たゝみいはしとは、白すといふ魚のほしたるにて、醬油をふりかけて、あみの上にてやきて用ふべし、又たゝみいはしを水に二日ほどつけおけば生の色にもどり、ひとつひとつはなるゝなり、是を白魚の代に獨活など入て吸物にして用ふべし。

吸口、淺草のり、揉てふりかくなり。

たいのかさはり拵へかた

鍋に鹽をやきつけかき、鯛をうすく切身にして入るべし、さて味淋にても酒にてもひたゝに入て煮るべし、さて酒氣ののきたる時に、米のとぎ水

の三ぱんとぎの白水を入て鹽梅して出すなり、是は鹽の加減を以て肝要とすべし。

小さき日記

（明治三十三年七月生男子）

（承前）　印東音鳴

明治卅四年一月二十二日。雪の中に兵士の通るを見（プップップ）と蹈り上りて喜ぶ。

れ菓子にても密柑にても他所より貰うて歸へれば必ず姉さんに一ッあげる、一ッよりなき時も半分ゐあげと言へば（ボーン）と云ひ割てくれとて出す。

二十五日。姉さん（オッカア）と敎へしに（オッカア）と云ふ、皆々大笑ひ。

女學世界に束髮に結ひたる娘の、小さき男兒の手を引きてゆく圖あり、是を見て拍手をなし母にもせよとて母の手を取る、何故ならんと考へしに先頃此本の續きに女敎師が三四人の男兒と鬼ごとを爲し、一人が手を拍ち居る繪ありしを見せたる事あり、其れ思ひ出せしならん。

二十六日。（あい）と初めて返辭の言葉を云ふ。

毎朝早くより眼をさまし（パーパオンマヒン〳〵）と云ふ。

母かき餅を切り居しに、側に來り三ッ四ッ緣側に持ち出し（アカ〳〵）と呼び投け出す。

夜ふとんを敷くを見れば直に（ゴーオクンナー）と云ふ。

二十七日。鷄に菜をやるを見てコーコ（香物のを）と云ふ。

四五日前よりヂー〳〵と云ひ出す、爺やを呼ぶ積りなり。

陶器の犬を持ち來り（アカボンボアブ）と云ふ。

二十八日。姉さんすねて唐紙にひっつき居りしに、其側に行き（オイデ〳〵）を爲す、姉さん動かず袖を引張り抱にたり種々にして連れ來り（アッタアコン〳〵）と唐紙を指さす。

二十九日。（カアー〳〵）烏（チユウ〳〵）雀を覺にる。

（オクンニヤア）と云ふ故どうぞお乳を頂戴と云ひと云ひしに（チヽ）と云ひ、お辭氣を爲しれて、を出す。

是より（チヽ）と云ふ、又此項より（アービン）と云ひ新聞など持ち來る。

三十一日。姉さん齒痛しとて泣くを見（ネ、イタ、アー）と云ふ

二月一日。植木や來りしにお馬見に行くとて負はれる。

婆やと遊びころんで頭を打ち（イタイトーン）と云ひ母に頭を押へ見せに來る。

三日。姉さん縁側より落ちしを見て泣く、又母に叱られテーブルの下にすね居りしを抱きかゝへ機嫌をとる。

四日。人形を負ひ喇叭を持ち喜んで遊ぶ。

五日。朝爺や來りしに急ぎ人形の頭髪を持ち、縁側に引づり行き見せる。

一人にては抱き兼ぬると見え、晝過ぎにも着物の裾を持ち逆に下げ居れり。

姉さんに大切の人形の顏を汚され泣く、姉さんあやまらず側よりしきりにれじぎを爲す。

此節は障子など獨りにてズン〳〵開ける。

八日。親戚の人來りしに（オトヽ〳〵）と云ひて烏やの帳面持ち來る。

十五日。感冒にて醫師の診察をうく。

十六日。同前(イケナイ〳〵)とて泣く。

二十一日。全快(イケナイヤイ、バカ、メー)「拇指を出す」など云ふ。

醫師の顏を見れば(イケナイ〳〵)と逃げ出す。

姉さん病氣にて寢て居るを見(ネ、ネンネ)と云ひ、密柑など持ち來り顏をのぞき機嫌を取る。

二十二日、おかゆを食べ(カライ)と云ふ。

(イチ、アー)「一時君の泣きまね」と云ふ。

二十三日。近所の子供(あかや〳〵)と犬を呼び居るを聞き(アカ〳〵、コゾ)と云ふ。

藥瓶を持ち(オック)と云ふ。

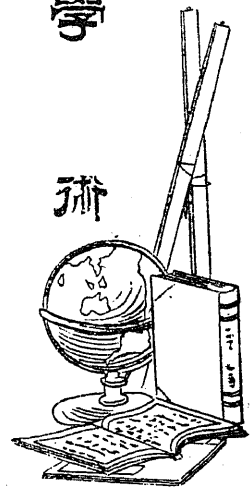
眼さへ離せば鉢植の梅の蕾を取る。

二十四日。惡戲をしても叱らずに能々言ひ聞かせば承知して(あい)と可愛らしき聲にて返辭を爲す叱れば泣き出す。

炭を食べ(ウマイ)と云ふ、其れは何かと問ひしに(オァンモ)と云ふ。

二十五日。足袋はだしにて台所より庭に出掛る。

二十七日。一時君の肩車に乘り、兩の耳を引張り(ヒン〳〵)と云ふ



鐵道の話（承前）

菊亭

英國に於ける線路貨車機關車の發達沿革は前に述べた通りでありますが、以上此等の諸機關を以て運輸事業をなせし起源は何鐵道かと申しますと、ダーリントン及びストックトン間の鐵道でありまず、之が世界中最古の鐵道でありまず、勿論これ以前にも鐵道と申すべきものもありましたが、機關車を用ひて今日見るが如き鐵道運輸をしたのはこれが始めてであります。この鐵道はジョージステフエンソンが技師長に推されて、萬事設計に從事しましたもので、千八百十八年に至りその設計が出來まして英國の議會へ線路敷設を請願いたしましたところ、兩度まで否決せられましたが、千八百二十一年遂に敷設許可を得、越へて千八百二十五年九月二十七日に開業いたしましたものであります、この次に出來ましたものがリヤプール及びマンチエスター間の鐵道でありまず、此鐵道もジョージ　ステフエンソンを技師長に仰きまして開業は千八百三十年九月十五日であります、第二に開業した鐵道ではありますが、世人の注意をひきましたことは一通りではありません。また實際前の鐵道よりも重要な鐵道でありました、よりて名稱をグランド　プリチッシユ　エキスペリメン

タル　レールウェー（大不列顛國試驗鐵道）と命じた位であります、この名稱は確かに當時鐵道といふものに左袒したものもあれば、また反對の位置に立つものもあつたことを證明して居ります。いつれの國にても最初鐵道を敷設するには、直接利益關係を持て居りますものゝ外は大概反對したものであります。英國もまたその例にもれず反對者が澤山ありました。その理由は只今よりいへば御笑の種でありますが空中をかける烏が死ぬとか草木がかれるとか、火災がおこるとかいふことが反對の理由であつたそうです、故に前にも申した通り、六ヶ敷名稱をつけて第二の鐵道を敷設し、其結果いかにと待ちかまへたであらうとおもひます、然るにこの鐵道はジョージ　ステフェニソンの設計になれる機關車を用ひて、至極好結果を奏したから遂に鐵道といふものゝ利益が認められたのであります、加之此鐵道の有名となつたについては、商工業上に大功績を現はしたのも大原因であります、爾來英國に於てはたれもかれも鐵道敷設に着手して盛大を來すことになりました。

英國に於ける鐵道の起源は前述の通りでありますが、我が國の起源如何にと調へますと、これまた隨分議論のわつたものであります、我國最初の鐵道は明治五年五月七日、横濱品川間の鐵道を開業し、次に同年九月十二日品川新橋間を開業し茲に京濱間を全通したのが起源であります。明治の初年鐵道敷設の議論あるや、當時は攘夷の聲のまだおさまらぬ時でありましたから、隨分頑固連中も多くその反對の激しかつたをは、かの英國にて最初に鐵道を敷設せんとしたときよりも一層甚

しきことであつたそうです、その中にも最も有力なる反對の理由は、横濱の如き外國人の多數居住する地と、御膝元なる東京との間に鐵道を敷設するは、其危險なること累卵の如し、一朝事あれば如何にして皇城を守護するぞといふのがありました、中には斯る計畫をなすものは、畢竟賣國の輩のすることで、實に奇怪千萬、言語同斷の次第なりなどゝ激烈に反對論を唱へた人もあつたそうです、當時の大藏大輔大隈重信氏即ち今の伯爵並に大藏少輔伊藤博文氏即ち今の侯爵の如きは、群議を排して鐵道は文明の利器なることを反覆說破せられて遂に敷設することになりました、よりて資金を倫敦東洋銀行に仰き、英國人エドモンドモーレルを聘して建築首長となし、明治三年四月十二日を以て起工し前に申しました如く五年に至りて京濱間鐵道の開業をなし、同年九月二十五日天皇陛下には開業式に臨仰ましまし、大隈伊藤兩氏に各御劒一口を賜ひて物議を排して廟議を贊決せし功勞を嘉賞あそばされました、京濱間鐵道の起工と同時に東海道の西部にも鐵道敷設の議を決せられまして、第一着に明治三年十一月神戸大阪間鐵道の起工をなし、七年五月十一日この阪神間の開業をいたしました。

以上申上げましたところも、我國官設鐵道の起源であります、かくて京濱間の鐵道は西に向つて延長し、阪神間の鐵道は東に向つて延長しまして二十二年七月一日に至り東海道線全線を開業いたしました、この後におきまして官設鐵道は高崎直江津間の信越線、敦賀富山間の北陸線、青森より日本海岸に沿ふて南するところの奥羽北線、また福

島より米澤山形を經て奥羽北線に合せんとする奥羽南線名古屋八王子間及篠ノ井鹽尻間を連絡せんとするところの中央線、さては北海道の官設鐵道等とつゞきて申上げますれば限りもありませぬから、これは他日申上げることとしてこゝには御預りにいたしておきます。

次に私設鐵道は日本鐵道會社が十七年六月二十五日上野高崎間を開業しましたのを始めといたしまして阪堺、兩毛、伊豫、甲武、水戸、大阪、讃岐、北海道炭礦、關西、山陽、九州等四十有餘の私設鐵道會社が出來まして今日では線路の延長四千哩に達しました、泰平の御代とはいひながら、誠に盛大なることであります、今日では尚以て足れりとせず、鐵道の發達頗る遲緩なりとて多年帝國議會にはいろ〳〵と名論が出ます位ですが三十年前を顧みれば、激しく反對せられて之を敷設するものは賣國奴などゝまで痛罵せられたところの鐵道であります、思想の變化といふものは實に甚しいものであります　（未　完）

夢のはなし　（承前）

東　基吉

夢は畢竟、不隨意的の想像作用である、別に自分からは想像しようと思はないで居て、併も寢て居る中に種々な想像が起るのである、吾人の心が活動いて居る有樣を稱して、心理學の上では、

意識的狀態　といふが、夢は尚心が活動して居るのであるから、夢の間吾々の心は、尚意識狀態にありといはねばならぬ、併しながら通例目醒めて居る時の意識狀態と違ふと云ふ點は、夢中の

意識生活は、丸で發狂者の樣な有樣で、殆んど統一がないといふ事、言ひ換へれば夢に於ては、吾〻の理性は全く力を失つて居る事である、取止もない、とても通例覺めて居る時分に考へることの出來相にもない、實行の出來相にもない事などが夢の時には譯もなく考へられ、譯もなく實行せられるといふのは、畢竟此譯である。だからして夢の中で考へた事や、した事には決して道德上の罪を負はせる譯には行かないのである。夫から今一つ覺醒の時の意識狀態と違ふ點は夢の中での想像は

頗る活潑明瞭である。　例令ば同じく、死んだ人を想像するにしても、醒めて居る時には、十分明瞭に其面影を心中に顯はすことが六ケしいけれども、夢になると、丸で實際目のあたり其人に遭つて居る樣に、あり〳〵と顯はれる、其他のことでも夢の考は至極明瞭に浮んで來る、この點が余程、普通の想像とは違ふ點である、夫に付いて面白い話がある。

ある處に一人の畫工が居つたが、頗る畫道に熱心な所から、種々に苦心經營して畫に從事したがいつも滿足なものが出來ないで、不滿で〳〵寢て仕舞ふのが常であつた。所がある朝、目が醒めて見ると自分の机の上に、一枚の繪が實に見事に立派に出來て居る、とても自分のなどか側へもより付く事が出來ない程甘く出來て居る。はて誰が畫いて置いて行つたんだらうかと、さま〳〵考へて見たが、想像がつかない、所が、不思儀な事には夫からといふもの、誰が畫いたとなしに毎朝立派な畫が出來上つて居るので、たう〳〵不思儀を友

達に打ち明けた、所が、其友達は、よし〳〵今度は僕が一つ考へてやらうといふので、其晩其友達がそつと、畫工の寢所へ這入つて、見張つて居つた、さて夜中になるといふと、どうでせう、今まで眠つて居つたと見た其畫工が忽然起き上つて、机の前に端座して、筆を洗ふやら繪具を解くやら、大騷ぎを始めて、さて靜かに一生懸命に畫き始めた。一心に精神を込めて丸で側目も振らないでせつせと畫いて、さて夜明頃になると仕舞つて寢床に這入る、そこで、此不思儀がやつと判然した。

明くる朝になると、又立派な繪か出來て居るので畫工は又一方ならず驚いた。自分で畫いて自分で吃驚してるのである。そこで其眞相を見屆けた友達が、夫を咄したのだが、始めは先生容易に信じなかつたといふ事である。

つまり、醒めて居る時には、吾々の心の中は、種々他の考が交つて來て、精神が專らにならぬことが多い考を一に集めて想像する事が六ケ敷い。だから、醒めてる時には、極判然と想像を浮ひ出させる事が六ケ敷いのであるが、夢の際には、或一の事に想像が向ふ時は、他の考といふものが一つも心中に浮み出ないで、皆鎭まつて寢て居る、そうして其一つの事丈けが力を專らにして、活動するのであるから、夢中の考といふものが、判然顯はれる譯で、又夢中に出來た彼の畫工の畫も、精神が他に妨げられない所から、見事立派に出來た譯である。

夢に付いては、尙記すべき事が澤山あるけれども、一先づ之で完結する事にする、之に付いて至極興味の深いことは、夢の日記を書くことである

毎朝起きるとすぐ、昨夜の夢を考へ出して夢の日記帳に記錄して置く。そして一年も經つてから、それをくり擴げて見ると、極めて面白い。併し普通の日記と引き合はせて見れば一層面白からうと考へる。

（をはり）

さみだれの
雲間の月も影ふけて
露けき庭に
とぶ螢かな

史傳

津崎矩子

下村三四吉

井伊直弼が大老の職に就きしより、内治の事といひ、外交の事といひ、共に尊攘黨の志士の企望に反せることのみ斷行せられしかば、幕府非難の聲大に高まり、直弼は之を鎭壓せんことを圖り、衝突の機既に發せることは、前述の如し。この頃水戸の士に日下部伊三次といふものあり。水戸邸の留守居鵜飼吉左衛門、京都成就院の僧月照及びその他の諸有志に結び、三條近衛等の諸公卿に謀り、水戸に勅命を下し、以て幕府の政事を改革せ

しめんことを計畫せり。その議遂に行はれ、内勅は八月八日（〇安政五年）を以て下され、鵜飼吉左衛門の子幸吉之を奉じ、日下部も亦同伴して京都を出發し、同十六日江戸に着し、小石川なる水戸邸に就きて、傳達せり、勅諚の要旨は、幕政叡慮に副はず、宜しく更に群議を盡して内外の治を正すべしといふに在り。廷議は、更に屋張、越前、薩摩、安藝、長門、土佐以下の十三侯に勅を下して、同樣の意を諭し、共に力を水戸に合せしめらる。また、同一趣旨の勅書は、十九日を以て幕府にも下されぬ、この事につきては、近衛忠熙公、廟堂の上秘密の間に周旋し、また、村岡も志士の紹介その他に關し、力を致せること少なからざりしといふ。

幕府勢權の振張策を執れる伊井大老は、朝廷が幕府を以て依頼するに足らずとせらるる如き勅諭を拜受して恰も挑戰狀に接したるが如き感をなせり。さなきだに、反對黨の壓服を圖りし大老は豈安然として、かゝる事態の進行に一任し了らんや。

老中間部詮勝は、大老の命を受け、開港の勅許を請はんが爲めに、その九月三日を以て上京の途に就けり、然れども、詮勝の上京は、むしろ反對黨の逮捕を以てその主眼とはなせるなり。詮勝の着京に先だちて、京都町奉行の手にて、志士の一人梅田源次郎を捕縛し、大に糾問するところありて、その連累者を探知したり、ついで、同月十七日には、詮勝京都に着したりしが、病と稱して未だ參朝せず、先づ悉く有志の徒を捕縛し、京都を一掃せしめたり。凡そ水戸へ下されたる密

勅に關係せるものと水戸を助けて周旋したるものとは、處士、公卿の家臣、僧徒、儒者、女流等に論なく、捕縛の厄にあひ、江戸に護送せられたり。世に戊牛の難といふは、即ち是れなりけり。

さて、前にいへる僧月照は、方外の身にてありけれど、尊王憂國の念甚だ篤く、頗る近衛忠熙公の信任を受け從つて村岡とも深く相知れる間柄なりき。月照は、内勅事件につきては、公卿と諸有志との間に斡旋せること多かりしかば、幕吏は夙に之に注目し、この時先づ逮捕せんとせり。事の由密に告げ知らするものありければ、月照は心私に決する所ありしかど、近衛公懇に諭して暫く身を潜め時を待たしめんとて、これを村岡並に西郷隆盛に謀り、隆盛に托して、月照を伴うて難を避けしめぬ。隆盛乃ち九月十日の早曉に共に京都を出發して、伏見に至り、轉じし大坂に赴きぬ。然るに、幕吏の探索甚だ嚴なりしかば、薩摩に潜伏せしめんとて、歸國の事を決し、同月廿四日大坂川口を出帆し、鹿兒島に到着したるは、十一月の初旬なりき。されど月照は、終には、「くもりなき心の月も、薩摩潟、沖の波間にやがて入りぬる、」との名歌を遺し、仲冬望月の夜、西海の波間に投じて果てける悲壯の事蹟は、世の普く知れる所なれば、その詳細を述ぶるに及ばざるべし。この訃音に接したる近衛公並に村岡の心情、察するに餘りあり。

尊王の志士に深き同情を寄せたりし村岡は、亦同じ厄難を被ふるべき身とはなりぬ。翌安政六年正月、京都町奉行より召呼出しの命を受けいかなる事ぞとて、直に往きけるが、そのままに拘留せ

られ、ついで二月の末に及び、網乘物にて江戸に送られたり。七十に餘れる老婦人、かかる憂き目を物の數ともせず、悠々安適して、胸中餘裕あり。

日々にかはる旅路に、かはらぬは、
人のこころのまことなりけり、

との途中一首の詠歌は、以てその綽然たる襟度を見るに足らん。

近衞公は、村岡が京都を出でゝ江戸に送られける後、之を懷ふの情頗る切にして、歌を詠じて意を述べぬ。

すさまじく荒るる東の空さして
ゆくさきいかにならんとすらん
一すぢの道のまことをしるべにて
あづまの山もやすくこゆらん

げに、村岡は、あづまの山もやすく越えて、恙なく江戸に到着せり。されど「ゆくさきいかにならんとすらん」

（次號にて完結すべし）

相約投淵無後先
豈圖波上再生緣
回頭十有餘年夢
空隔幽明哭墓前

隆盛

文苑

偶作六首

佐々木信綱

春の野につくし摘む子ら子らの如
　われも幼なき時はありしを

學ひやゆ歸りこし子のほこりかに
　かきてはみするちりぬるをわか

撫子に花さかせむとおのが身の
　春はすくしゝ女教師の君

ねもころに子らを教ふと老て猶
　鞭とりませる師の君あはれ

七つ子のいたづらざかり親だにも
　手にあまれるを教へます君

鬼か嶋せめて歸りし勢ひに
　門より歸る學ひやの子ら

馬二十五首

（竹拍會兼題）

樺山常子

ひな歌をうたひかはして馬曳て
　野道すき行く童への友

松平岳子

いつくにか急きゆくらんますらをの
　手飼の駒に鞭かはせつゝ

增山深雪子

あれに荒れて向ひより來る放れ駒
　道行きふりのむねそとゝろく

板倉止子

いさましや外國迄も踏ゆかん
　ますらたけをの乘ませる駒

堀越科子

紫のせて馬の綱とる童への
　背にも薪をおひて行く哉

松井友子

馬の背にまどは眠りてゆひつけし
　花に小蝶の狂ひ〳〵行く

三宅貞子

ほまれあるけふの戰ひのる駒も
ともに勇むか高く嘶く

大竹伊勢子

ゆるひなく心の駒に鞭うたん
道の長手はよし遠くとも

岩本芙玖子

荒駒の風にいなゝく聲かれて
枯野五十雪西に飛ふ

岡田文子

やめる夫の藥の料と馬市に
馬引行けは朝風さむき

田中たを子

たくましき馬に鞭うちいてましゝ
君かみ姿見むよしのなき

中村文子

松林馬ひきかへる人かけよ
あのひな歌よ我背なるらん

有賀晴子

それとなく歌にまきらし引く綱を

君やあやしむ花よめの君

關屋愛子

なれなくは妻子三人をいかにせん
我屋のかまと馬にさりける

久保花子

かなひたる其ねき事や何ならむ
社の軒の新しき繪馬

市田豊子

ますらをか駒のりならす夕くれの
馬場のあたり花ちりみたる

森田妙子

馬あらふ里の小川の夕くれに
光たゝよふ三日月のかけ

片山柳子

打つゝく水田の中に馬一つ
繪にある如き此處のさま哉

小林茂子

夕まくれ父はあるきていとし子を
馬にのせゆく畑道かな

遠山直子

汝も又國をや思ふますらをの
駒そいさめる戰のさま　松本文子

霞たつ野原にむるゝ若駒の
別れ〳〵にならんとすらん　池谷淺子

月おぼろあたりしつけき春の夜に
老馬をなてゝゑむ翁かな　小笠原政治

のりましゝ主かはふりの朝まだき
うまやの中に馬ぞいなゝく　稲垣安子

れそくとも心の駒したゆますは
文の山道いつかこゆらむ　佐々木雪子

幼なとち木馬にのりて遊ふかな
みとり涼しき庭の芝原

雑詠三首

聞郭公　いく子

おもひねの夢かあらぬか郭公
たゝ一こゑをありあけの空

名所河

こゝとゝひしむかしを語れその世より
すみたの川のみやことりはも

曉水鷄

ひとをまつ心ならひにたゝく戸を
あけてくひなのあかつきの聲

雑詠三首

友の結婚を祝ひて　鷺水

色かへぬ千世のはしめの若緑
ふかき契りや相生の松

春を惜みて

梓弓はるのゆくへをたつねてぞ
ひくまの野邊にかりくらしける

故郷なる友に

あひ見んと思ふ心のせつなさに
今霄も君をゆめに見しかな

春の歌三首

敏子

曙

つく〳〵と思ひ暮してはれやらぬ
心ににたる春のあけぼの

霞

限りなくかすみにけりな懐しき
都のそらやいつこなるらむ

鳥

花になく小鳥の聲も匂ふなり
都の春もかくやのとけき

蝶

東くめ子

春の御神の　みつかひと

世の歌人に
胡蝶の身こそ
夜はすみれの
朝はひばりの
春のこてふの

白き蝶

散りかふ花と
ともにしまへば
花に似たりと

黄なる蝶

枝もたわゝに
山吹のへに
いづれを花と

黒き蝶

げに花よりも

めでらるゝ、
樂しけれ
床にねて
歌をきく
おもしろや

うちみだれ
わかすがた
人はいふ

咲きをゝる
やすらへは
人はとふ

うるはしき

わがよそほひは　人の世の
綾もにしきも　およばしな

つばさは輕き　うすぎぬの
くろき羽袖に　さま〳〵の
あやおりなせる　わかころも

われこそ蝶の　王ならめ
しろたへの衣　清けれど
山吹がさね　色はよくとも

言はず語らず春の日の

野口雨情

言はず語らず春の日の　潮はなやぐ朝ぼらけ
言はず語らず春の日の　陰にこぎ行く漁舟
言はず語らず春の日の　永き光線の海の上
言はず語らず春の日の　靜に沈む雲のいろ

言はず語らず海士の　波路をかへる夕間暮
言はず語らず海士の子が　磯の子松の陰に立ち
言はず語らず沖行雲の　雲眺め待つは誰が子ぞ

花の袂

つねを

かすむ春野に　もえいづる
すみれ蒲公英　つくづくし
はなのたもとに　あまるまで
摘むうれしさを　門に待つ
妹とはゝとに　わかたばや
あねと弟に　みせばやな

說林

動物愛憐と教育（承前）

本田增次郎

次には動物哀憐の教育的價値に付て申しませうまづひどい例ではありますが、殺人犯の多數は屠牛者とか獵師とかいふやうな殘酷な業に從事する者より出づるそうで、動物保護の行はるゝ國ほど殺人犯は少ないといふ事です。凡て吾人は皆教育者たるべきもので、只に人に向て教育者であるべきのみならず、又動植物に對してもひとしく教育者でなければなりません。西洋人が犬猫を教育する注意、忍耐、苦心は丁度人を教育するやうで、まるで下等動物とせずに人間のやうに取扱ふのです。それで動物も亦よく人語を解しまして、人情に通じ人に益し人の友となりまして互に精神的感化を及ぼして居ります。こういふ風に動物を取扱ふ態度で盲唖や子供を取扱つたならば、吾人の得る所はどんなにか多いでせう。子供は殆ど下等動物に近いほど理性の發達して居らぬものですから、之を取扱てやるのには大人はよほど注意してやる志要があるのです。

大人となりてから婦人や薄命者に對する心やさしい態度は、まづ動物を憐む事から教へはじむるがよろしい。今爰に一の下等動物がありましたならば、それに只藏を教ふるばかりでなく一種の德

性を養ふ事、衛生上の注意を與ふべき事柄は隨分澤山あります。それに日本では家畜に對しては隨分不注意で、之より受くべき當然の効果を十分受くる事ができないのです。そこで一家に養うて居る犬猫雞などを子供に分擔させて、吾物として責任を以て飼養教育させるといふ事は大變有益で、其やさしい注意は移して兄弟他人に、又男は女に對してあらはす事になりませう。しかるに下等動物には少しも注意せずに、卒然人間に對してこうせよ、あゝせよと言ふのはそも〳〵無理な話なんです。

次に、動物取扱問題に對する歴史はどうであるかと申しますと、まづ佛教は動物愛憐に付て最も力を盡すべき地位にありまして、動物愛憐に關する歴史、文學、逸事等多くありませう。儒教も亦仁を禽獸草木に及ぼすべきを説いて居ります。一體此動物愛憐といふ事が教育上果して肝要なものであるといたしましたならば、日本でもいろ〳〵其思想の變遷及事實を調査して教育の材料とすべきであります。今歐洲に於る對動物道德の變遷を一言いたしますが、ギリシア時代には動物の知惠に由りて藥を得たといふやうな傳説、又は動物を愛憐すべしと説きし學者もあり、又雀一羽を虚待した爲に死刑に處せられるなど律令のきびしいのもあります。次にローマ時代には尚武の氣象養成の爲に、獸類を相たゝかはせて見物する事がありまして、大に愛憐の心を殺ぎました。それにも拘らず大體に就ては愛憐の心の表はれたる文學、哲學説及佛教に似た輪廻説もあり、又プルターク出でゝ德義上動物愛憐の必要な事を説きました。次に

耶蘇舊教の時代には動物虐待をとがめぬばかりてなく、少しも愛憐すべきことを教へず、靈魂あるは人間のみと信じ人間の救濟のみに重きを置きしが爲に、動物を愛憐するまでには至らなかつた。處か舊教では隱者修道者とでも言はうか、山又は砂漠に入りて人間と交際を絶ち讀經冥想を事とする僧侶があつて、こんな人は自然外に相手がなくて動物のみと交はつた。それで之等の人にはいろいろ動物に關する傳說がありまして、聖コルマンは牝鷄とはつかねずみと蠅とを友とした、鷄は時計の代りになり、はつかねずみは眠くなつた時に耳を引ぱる、蠅は本の讀みかけの處にとまつてしをりの代になつたなどゝいふ傳說があるのです。そうしてこんな傳說は幾百もありますが、今でこそ妄誕と思ひますが當時の人は此傳說を信じて居りましたから、間接に動物哀憐の思想を導きました別に宗教の教義として動物哀憐を說いたのではありません。求に新教時代となり十八世紀に至りて初めて此動物哀憐の思想が起りました。イタリーとスペインハ今も舊教が行はれて居りますから、動物哀憐はあまり行はれませんで鬪牛など殘酷な事が盛ですが、新教起りて輓近百年內に此思想は大に盛になりて、今日歐米にては其爲の法令、會合、出版物及事業など隨分澤山あります。

まづ會合では、生体解剖に反對する會、冬鳥に食物を與へんとする子供の會、廣く動物を保護する事を約した會、などがありまして、米國のごときは此種の會が二十計もあります。出版物で名高いのはブラック、ビエーチーといつて馬の自傳を書いたもの、ピューチフルジョーといふ犬の自傳

ボイセス、フオア、ゼ、スピーチレスとて古來動物に關する詩文を拔萃せるもの、ワイルド、アニマルス、アイ、ハブ、ノーンとて野獸に付ての實見した觀察談を動物自身の立場より書いたもの、其他雜誌も隨分澤山あります。事業としては迷子となつて居る犬猫を拾ひ上げて養育する事、病犬猫を世話する事、途中になやめる牛馬を助ける事、即ち言はゞ動物の養育院慈善病院のやうなものが澤山あります。

今度は有名な人の動物哀憐に對する訓言を少し申しませう。

古代の英國著述家の詞に「已ニ優リテ他ヲ愛スルモノ此地上犬ヨリ外ニナシ」とあります。

ボープは「歴史ハ友人間ノ忠實ヨリモ犬ノ忠實ナル例證ニ富ムヿ多シ」と申して居ます。

獨逸のヴイッシャー（審美學者）は社交場裏に在る毎に「唯心ニ願フ所ハ一頭ノ犬ノ在ランヿ也」と云ひました。

バイロンの犬の碑文には

「玆ニ其遺骸ヲ留ムルハ、
美貌ヲ具ヘテ之ニ誇ル心ナク、力アリテ他ヲ凌ガズ、
勇アリテ猛カラズ、人間ノ美德ヲ悉ク具ヘテ人間ノ不德ナキモノ也」とあります。

ツルゲネフ（魯國ノ文豪）の書物にはこんな文句があります。

「吾ガ犬ト吾ト兩個室中ニ坐セリ、戸外ニハ暴風吹キスサメリ、
犬ハ吾ニスリヨリテ眞一文字ニ吾兩眼ヲ打守ル
吾モ亦眞一文字ニ彼ノ兩眼ヲ打見ヤル、

其狀恰モ何事カ吾二談ラントスルモノヽ如シ彼ハ啞者ナリ、言語ヲ有セズ、又彼自身ヲ解セズ、サレド吾ハ彼ヲ解ス、

吾ハカク解セリ、彼ト吾ト此瞬間同一ノ感情ニ支配セラレ、兩者ノ間聊カノ相違ナシ、吾等兩個ハ同類ナリ、同一ノ燄其胸中ニ燃エ輝ケリ、死ハ其ガ廣キ冷タキ濡レタル翼ヲ以テ襲ヒ來ル

—萬物是ニ於テ終ヲ告グ、

其時吾等兩個ガ胸中ニ燃エタル燄ヲ區別シ得ルモノハ誰ゾ、

否ナ〳〵カク互ニ目ヲ以テ相談ルモノハ獸ト人トニアラズ、

カク互ニ見カハス二對ノ眼ハ一樣ニ造ラル、

斯ノ人ノ眼、斯ノ犬ノ眼、共ニ明白ニ語ル所ハ相互ノ寵愛ヲ切ニ求ムルノ情ナリ」

次には動物に關する お話しを少し致しませう。

ホイットフイールド教授の説に由りますと、鰕は人間と同じ割合で鋭敏な覺竟、頭腦、神經系統をもつて居るといふ事です、して見ると生きたるまゝ煮たり、焙つたり、樽詰にして幾日も打捨て置いたりするのは實に殘酷だといはねばなりません。

（完）

寄書

小供の正直

相模　平岩繁治

私の只今をります所から半里許り西南に當て南湖（茅ヶ崎）といふ漁村に、茶屋町といふ町があり升（東海道に在り）其の町の某氏は飴菓子等賣りて日々の生活を立てゝ居り升、或る日上方風の旅人（男子）が休みまして菓子等喰べましたが其の時合惡其の家の母は用足に參りたくなりました故、丁度五才（昨年）になる男の子に汝は是にをるだよ母は少し用があるからと言ひて出て行きました、そこで此の子供は感心にも母の代りにと始終其の旅人に目をくばつてをりました處、旅人は其れとは知らず、母の大部暇の取れるを幸として、傍にありました卵子を三個程盗み喰ひて其の皮をばたもとに入れてそ知らぬ振をしてをりました、其の中母が出て參りましたので旅人はあわてゝ菓子の代丈拂つて出て行ふと致しました、そふすると其の子供は急に口を開きて「母さん卵子〳〵」と叫びました、母はひよつと氣がつきて卵子のある所を見しに二三個位少ひ樣に見へました故、其の旅人を呼び留めて尋ねましたのに旅人は何氣ない風で知らないと答へます其の子供又口を開きて喰はれた〳〵といひて今度は泣き出したもんですから旅人大に怒りたれ共遂に包むにつゝまれず、たもとの中より卵のからを出して再三誤りて後、三個の代價を拂ひて去つたといふことでした此の樣

に子供と雖も中々馬鹿にはならぬ者であり升、又自家を保護し或は父母の勞を助けるといふ事は此の幼き時分から發達して是非善惡は承知してをるのであり升から、父母兄姉等の導き樣如何に依りて善とも惡ともなる者であり升から充分此等の點には其の指導の任に當でをる者は吳々も注意せねばならぬ事であり升。

梅ちやんの日誌

三河　鈴木かなへ

妾の妹に今年四歳になる梅ちやんと云ふのがあります、妾が常に大事に遊ばせてやるもんですから御母さんの方は餘り慕ひませんで、却つて妾が少しても居ないと直ぐ泣き噪はきますけれど、妾も只今は村の高等小學校へ往かねばなりませんから、同じ樣に遊んで許り居る譯にはいきません毎朝學校の始まるまでは種々珍らしい業をして見せて喜ばせますそして最早學校が始まらんとする時に、梅子ちやん、姉さんは、今から學校へ行つて面白いお話を習つて來て話して上げるから大人しくして遊そんで居るんですよと謂ひますと梅ちやんはもー大層に悄れ顏をして御母さんの許へ往きますから、妾は直ぐ學校へ行きます、或日のこと妾の村に近藤先生と甲す御方がありますが此の御方は小學校の先生で妾の御父さんとは別して親しい間ですから度々御出でになつてお話など致されます、此の日は折り惡く御父さんが要用で他へ行かれた留守でしたから先生は雜誌や新聞を讀で御出でになつたが、退屈をなされましたと見え、妾と梅ちやんと遊んで居る椽側へ御出てになり

「梅ちやん味好い饅頭を上げるから、叔父様の方へ入らつしやい」と、謂はれますと、梅ちやんは、可愛い小さな兩手を廣ろけ顏中一杯笑みを散らして直ぐ、抱かれました、すると先生は「梅ちやん叔父様がね今梅ちやんの御腹を撫で押すとすぐ菓子や羊羹が出て來ますよ」と謂はれて、右手に菓子を持ち左手にて梅子の腹を押し「そーら御覽ん」と何度も〳〵右手の菓子を見せますとさあ梅ちやんは膝の上で大喜びで終に先生が大好になつて一寸も離れませんかち御母さんや妾が手に々々菓子や玩弄物を持つて見せてさま〳〵にすかして見ても一切聞き入れません、詮方なく其の夜は　とう〳〵先生を御賴みして梅ちやんを寐させて頂く事にしました。

毬歌と子守歌

佐藤生

備後の毬歌

一出て廻れ、私石割な。石割ならこそ。石割ます
る
二出て廻れ、庭掃な。丁稚ならこそ、庭掃ます
三出て廻れ、私しやみひかな。藝者ならこそ、しやみひきます
四出て廻れ、私しわよらな、年寄ならこそ、しわよります
五出て廻れ、私碁はうたな。どうちならこそどうちます
六出て廻れ、私櫓はおせな、せんどならこそろをおします
七出て廻れ、私質おかな。貧乏ならこそ質おきます

八出て廻れ、私はちやわらな。めくならこそはちわりまする

九出て廻れ、私くわうたな。百姓ならこそくわうちまする

十出て廻れ、私字はかゝな。先生ならこそ字をかきまする

同上子守歌

一ツトヤーヒトノカガミトナルヤウニナルヤウニガクモンハゲミテオコタルナオコタルナ

二ツトヤーフミヨムコトヲシラザレバシラザレバマナコアレドモコウハナシコウハナシ

三ツトヤーミメハヒトナミスグレテモスグレテモマナバニヤミノナキヤヘザクラヤヘザクラ

四ツトヤーヨルヒルタヘセヌタニノミヅタニノミヅツイニハハテナキウミトナル

五ツトヤーイマハムカシトホシウツリホシウツリヒトノコウカモチヘシダイチヘシダイ

六ツトヤームヅカシトテマナバズバマナバズバイカナルコトヲモナシガタシナシガタシ

七ツトヤーナンギハワガミヲタマニスルタマニスルトイシトオモウテットムベシットムベシ

八ツトヤーヤマナカソダテノシヅノメモシツノメモマナビシダイニキレウアリキレウアリ

九ツトヤーコヽロニヲチエヌコトガラハセンギニセニギヲカサヌベシ

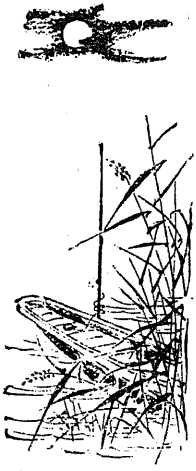
十トヤートキヲヲシミテオコタルナオコタルナフタタビカヘラヌヒカリナシヒカリナシ

肥後の手毬歌（座り打ち）

合志章子

一つーでは乳を呑み初め二つーでは乳をはなれて

三つーでは水を汲みそめ四つーでは夜なべしそめ五つーでは糸をとりそめ六つーではころ機織りそめ七つでーは綾を織りそめ八つーでは屋敷ひろめて九つーでは心定めて十ーでとのごをもーたーせた十一ーで花の樣なる御子をもーたせた十二ーで其のおー子のお宮まいりにや宮の下から。水がどんどーとと出ーてきて、其の水にや何を流そか赤ひ小袖をなーがしてま一ーつーは何を流がそか黑ひ小袖をなーがしたひーはー一つさ



六月（みなつき）

せく生

「みな月」とは、六月の昔の名である。今でも歌を咏む場合等には、矢張此の語を用ふ者がある。何故六月が「みな月」といはれたか。其の譯は鎌倉時代の歌仙藤原清輔が、初めて二樣に考へたのである。一っは、此の月は農夫が事を爲盡した月即「みなしつき」であるから、其れを訛つて「みなつき」といふのであるといひ、一っは此の月は年中で尤も暑くつて水の源が涸れ盡きて、田にも水が無

くなるといふみづなし月を訛つて「みなつき」といふのであると。

其の後の人々は大抵は皆後の說を信して、字を當てるにも「水無月」とのみ書いて、少しも怪まず居た處が、德川時代になつて其の所謂古學派の牛耳をとつた眞淵先生一派は、大に古語を研究した結果、「水無月の說は何うも不可水の無くなるのは八月であつて六月でない。六月を「みづ無月」と思ふは飛んでも無い僻事だ」と横槍を入れて、雷の無い十月を雷無月といふ樣に、六月は尤盛に鳴る月だから、雷鳴月である。其の上下の「か」「り」を落して「みな月」といふのである。雷を「かみ」といふ證據は雷丘を「かみを

か」といふ通りであると新說を立てた。

處が明治の御代になつて、又一つ奇拔の說が出たのである。水野秋彥先生のである。「六月は炎熱燒く如き夏の眞中で「眞夏月」と云つたのであつて其の「つ」の音が二つ重なつて居るのを一つ落して「みなつき」と云つた。其の證據は、昔の歌などを見ても「みな月」は皆直夏の事を咏であるのが一つ又昔の朝臣に久我三夏橘三夏、藤原眞夏橘三冬藤原眞冬等の人達が澤山あつて、「みなつ」「まなつ」の語が多く使はれたのが分つたといふが一つだといふのが、何うも卓見ではあるまいかと思ふのである。

山邊の赤人（萬葉集）

不盡嶺にふり置く雪は六月の
十五日に消ゆれば其の夜ふりけり
柿の本の人麿（全集）

六月の土さへ割けて照日にも
吾が袖乾めや君にあはずして
凡河内躬恒、みな月のつごもの日よめる

夏と秋と行きかふ空の通ひぢは
片方涼しき風やふくらん（古今集）

仝じ人

みな月の河邊のはらへ小夜更けて
だもとに秋の風かよふなり

序にいひたいのは、六月の異名に涼暮月、松風月、風待月、鳴電月、常夏月などあるをである。

風吹けは池に波よるいつみなる
すゝくれ月の頃にもこそなれ

（莫傳抄）

雲たかみあめふり山のけふよりは、
まつかせ月の夕暮そふる（莫傳抄）

松かげに床居をしつゝけふははや
風待月の夏のうとさよ（顯昭）

夕立は猶はれやらでなる神の
月にもなりぬ夏の暮るらむ（定家）

ありはらひいもにも見せんとこなつの
月まちえたる花のさかりを
（御製）

米國に於ける我が二人の女學生

これ米國ボストン、サンデーグローブに記載せるを譯したるもの、即ち一人は井口あぐり孃、他の一人は牧野清孃なり。共に我が女子高等師範學校卒業生にして、當時彼地に留學研究

せられつゝあるなり。一日該新聞記者二孃を其の寓に訪ひし時の對話を書きたるものにして、其の肖像もともに立派に掲けられ居たり、今之をこゝに寫すを得ざるは大に遺憾とする處なり

譯者　や、て、

記者其の表題として。二孃の肖像を掲げて曰く

遠く故山に便りなき姉妹の爲めに、我がボストンに留學せる東洋二婦人の肖像（井口氏は和裝牧野氏は洋裝）

井口あぐり女史はボストン体操師範學校に在りて體育科研究中、牧野滑子孃は、インスチチェート、オヴ、テクノロジーに於て生物學修業中なり

共に我が亞米利加を賞賛して止まざれども、尚ほ歸りて、其の教育に任ぜんとする故國交友を思ふの情頗る切なるを見るべし

と、更に本題に入りて井口孃を紹介すらく

今冬當市に東京より二人の日本婦人の來往せるあり、何れも遠き故郷の教育に盡す所あらんとて、今や特殊の學科を修業しつゝあり、

井口あぐり孃は、故マリー、ヘメンウェー女史の創立せし、ボストン躰操師範學校に在りて、其のメカニックビルディングに寄宿す

目下孃は本校の二年級なり、其の入學前一ケ年間スミスカレッヂに於て研究せしなり、孃は其の在郷中已に躰操及躰育學につき頗る研究する所ありしが、更に一層の研修をなさんとてハンテングトンアヴエ校出身の躰育學のドクトル、ベレンセン孃の紹介に由り今回當校に入學せられしなり

と次きに其の對話を記して曰く

孃は可笑しげなる吶れる英語にて

只今日本にては女子の躰育につき八釜敷ございます、それで政府では其の体育法につき研究せよとて私が指命されまして當地に留學する事になりました、

私は東京女子高等師範學校で教育されましたが、此の學校はこちらのカレッヂ位に相當するのです、其所を卒業しましてから五年間の義務年限と云ふがありますから政府の指定で初めは其の學校に居まして、次に地方の私立高等女學校に奉職し又もとの學校に轉任しました、

其の中に政府からこちらに留學する樣に指命がありましたのです、それから私は先づノルザムプションに參りました、其處には私の先生で東京に居らるゝ方と御存じの貴婦人がありますので、私は其方と同居して英語を修むる便利がありましたからです、日本からは直ちにシャトル市につきまして、次にウォシュに參りバンクーバーで私の朋友などゝ面會致しました、

參りました當時は萬事なれませず心細くも感じましたが、御國の人たちは大變御親切にして下さるものですから、早や此の夏なぞはニューハムプシャーのジャフリーやメーンのフレーベルグ、エーグル島などで實に愉快に暮らしました、只今では多少英語に馴れまして

ボストンは誠に住ひよい處だと思ふて居ります

學校では最初に私に家庭教師をつけて呉れましたが、直ちに皆さんに追付く事が出來ました

て、只今では皆樣のやる事はどうやら出來る樣になりました、ロープ（繩を用ふる体操ならん）も半分位は出來ます、私は元から体操は大好ですから東京に歸つたら躰操の教授が出來ると思うて喜んで居ります。

私は女子高等師範にまねつて躰育學を教へ日本女子の体力を進むる積りであります

記者筆を一轉して曰く

長く未婚の婦人として男子の助けを受くるなく獨立して種々の事業に盡粹せんとする女子に關し日本に於ける狀態を問ひたるに

左樣日本では女子が獨身で暮らすと云ふは極々稀で一般に奇態に思ふて居ります、私の國では女子は遲くも廿歳普通は十六歳で結婚します

廿五歳位でまづ緣づかぬ婦人は先づ〳〵年寄りの賣殘りの樣に思はれます御國で云ふニューウーマン（一生結婚せざる婦人）と申す樣なものはありません

そして私の國では女子が獨立して業務にあたりましても自分で生活致すと云ふばかりで結婚しました女子と全く同じ樣な仕事を致して居ります

と更に曰く

孃は故鄕戀しげなる調子にて猶話をつゝけて

私の母は極昔かたぎの人ですから私が此の年まで獨身で居るのを奇態に思つて居りますが父の方は只今國學の教師などをしてありますだけ、自然當今の事情にも通してゐますから餘り不思議とも思ひませんです

私は兄弟は男三人女三人ございますが遙々此方に參つてをりますれば時々は堪え難き情にうたるゝ事がございます

と云ひさして懷鄕無限の念を抑へんとしたりしが如くにて

アなんです、國の　兩陛下の御眞影を御目にかけませう、御覽なさい御二方とも御洋裝で御出になります、ヲーッ此方の方其のまゝでせう

と云ひたる孃の和服の如何にも似合へると其の隔意なき孃が應接とに思はずも「イヤ貴孃は日本服で如何にも立派に見えられますよ」と一言口すべりしに、孃はさも愉快氣にソーデスカ私は女學生用にと思ふて作つた日本服を持つて居ります、若し御望みならば一重ね差上げませう、着物ばかりか何も蚊も私は只今ではほんの亞米利加人ですから和服は不用です

記者終りに筆を加へて曰く

孃の寓所は學校の傍なる開豁なる所にして、室內の裝飾より日常の器具に至るまで、日本皇室の寫眞を除きては、凡べて其の同窓學生と少しも違はざるなり、先づ亞米利加に於ける普通の生活なれども、其の優美にして雅致あり開豁にして爽快なる點に於ては古代羅馬の諺を知るや知らずや、兎に角確かに其の眞意を得たるものゝ如し

と余は本號をこゝにとゞめ、更に次號に於て牧野清子孃を紹介せん。

結婚論（承前）

野本生譯

予は、又、世の青年男兒が、人世の或る一節點に到達する迄は、全く、彼等に求婚の權利なきものと信ずる。即ち、其の年齡、及び目的に關する或る一段落に到達するに至る迄は、未た妻を娶るの權利なきものと信ずるのである。年齡に就いていへば、青年は、少くとも廿五歲に達する迄は、結婚を見合はせねばならぬ。青年此の期に達せざれば、意思定まらず、心は常に浮動して止まない此故に、彼等は、あらゆる事を成さんとて、凡べての方面に漂泊流轉して徒らに煩悶する。彼等は浮世と浮世の人々の如何なるものであるかを心得ずして、而も、自らは、何事も能く會得して居るかのやうに思ふて居る、處が、其の實、全く會得して居らないので、是れは、十八歲より、廿五歲迄の青年の陷り易き誤解である、而して、齡廿五に達し、或は之れを超ゆるに至れば、其の以前に知れる事、又、心得たりし事の如何ばかり、狹小なりしかに心付くのである。然れば、人は廿五歲を超えて後始めて、事物の何たるを學び得るので、彼等は、此時より漸く、凡べての事物に對して、能く其の眞意を解するやうになるのである。要するに、廿五歲前は、己れは、他の人々よりも一層能く物事を辨へ、能く心得て居つて、一廉に成人してゐると信じて居るが、廿五歲を超ゆれば其の知れる所の、極めて偏狹にして、自分は未だ一箇の不完全なるものに過ぎないといふ事に思ひ到るのである。青年、此期に達すれば、彼等が、從來の知見の、極めて些少なりしに驚きて、更に

事物の研究に志すやうになるのである。丁年前後の青年には、己れ能く女子を知れりと信じ、輕卒に妻を擇ばんとするものが多い。然れど、丁年前後の動靜常ならざる彼等の意思は斯かる問題に關與すること猶危險多ければ、予は決して、これに觸れざらんことを忠告する。青年又此の期に達せざれば、自己の能力を知る事能はず、心中不變の目的なく、又、已が能力の果して何等に適するやを知らず、世務機運の如何なるものなるやを心得ず、猶又、彼等は、己が能力の、更らに、優等なる地位に適するや否やを、其の主人、先輩に示すの機會をもたない。此故に、其の企圖するところのものは、毫も實際的觀念に伴ふて居らない。即ち、何事も、實際に形成する事が出來ないのである。廿歳より廿五歳迄の時期は、彼等が、世に出づる準備の時代で、此間は、彼等自己一身の經營辛苦に對するより他に餘分の責任を負はないやうにするのがよい。然れど、齡廿五に達すれば、彼等の心意、漸く、定まり、人、其の言ふ所に始めて、耳を傾くるに至り、曾ては、一顧の勞をも拂はれざりし身も、今は、明かに他の注意するところとなるのである。彼等は、是に至りて、始めて人生の道程に上ぼるといふべきもので、深思熟慮の末、己が生涯の伴侶となるべき妻を娶るべきや否やを決するは亦正に此時期である。人、若し、世に出でゝ、何事をか成さんと思はゞ、廿五歳より卅歳迄の間は、大に、其の能力を試みなくてはならぬ、此故に、善良なる妻女の慰藉と助言とは彼等にとりて、極めて必要となるのである。一般の統計によるも、我國の青年は廿五歳より卅歳迄

の間に結婚するもの多く（約七分）年齡の若きに從て少くなつて居ることが分る。數年前迄は是れと違て、其の結婚年齡は、多く、廿歲より廿五歲迄の間であつたのである。

然れど、又、同時に、妻を娶ることの晩きに過ぐるも亦宜敷ない。此處に晩きに過ぐるとは、齡卅以上をいふので、人、齡卅を超ゆれば、獨居の性癖慣習固着して年を經るに從ひ、愈〻拔き難きに至り遂に妻を娶ることの却て困難なるを覺ふるに至るであらう。何となれば、結婚は、女子が之によりて女兒的快樂を犧牲に供すると同じく、男子にとりても亦多少の讓步を要求する事勿論にして兩者豫め此の覺悟なくてはならぬからである。此故に結婚は或種の人々の思ふか如き輕〳〵しきものではない。結婚はなぐさみ半分のものでなきのみならず、又單に結婚の爲めに結婚すべきものでもない、人若し、結婚せんが爲めに結婚するかもしくは、齡を經つて來るからといふので以て結婚するのならば、寧ろしない方がよいのである。

要するに、青年諸士は意中の女子に逢着するに至るまでは結婚すべきものでない。斯は、以上所論の全部に貫徹せる唯一安全の法則なので、女子と年齡とに關する凡べての疑問は是れによりて決することが出來る。然れど、出來得べくんば、廿歲未滿の女子と婚することを避けよ。而して、諸士も亦、廿五歲未滿にして妻帶することをやめよ。許嫁に關しては、予は其の時期の可成丈け短きがよいと思ふ、尤も許嫁に就いては、其の當人等の便宜、事情等の爲め一概に論ずることは出來ない

然れど、一般に人々は、許嫁を爲すこと、餘りに早く、從て、結婚に到るの道程遠さが爲め其の間永く心を惱ますものが甚だ多い、此故に予は、彼等が相識の時期を長くして、許嫁の間を短くすれば、諸事都合よく運ぶであらふとおもふ許嫁の時期を長くするは決して褒めたことでない斯は、何れの方面よりするも甚だ不都合な事で、寧ろ、許嫁に先つ相識の時期を永くするのが遙によいのである。男女相互に相識ることの極めて、肝要なるに不拘、世の男兒にして、能く、其の女子を知りて後、是れを娶るもの果して幾人あるであらう、又、世の女兒にして、深く、其の男子を識りて後是れと婚するもの果して幾人あらうか。（未完）

寡婦と愛子

（アー井ング）（承前）

一　二　三　生

嬉しいのと、悲しいのとが交々混つて居る此再會の詳しい事は別に述べませぬ、とにかく、若者は生きて還つて來ました、家に歸つて來ました、で老母の心を慰め、老母の身を養ふべき望を與へて共に住む事が出來た、しかし惜しき事には彼の氣力は全く盡きました例へ一縷の望みがあるにしても家のかく頽廢したのを見ても、運命を斷ちて死なぬ事はないのでありました、「ジョージ」は蓐の上に身を横にした儘老母が夜通しの看護のしるしも無く一度も、枕を上げず、哀れ黄泉の客となりました。

村の人は、「ジョールジ、ソーマース」の歸つたのを聞いて、各々訪問に行きました、皆思ひ〳〵

心を盡して、出來得る限り慰めやうとしました、が彼は身躰が弱つて、口も聞けませんで、唯眼に感謝の色を浮べるのみでした、彼の母は、常に其側に居つて、子も亦他人の手に助けらるゝのを望まないやうでした。

人と言ふ者は病氣で、枕に附いて居る時は、日頃の大人の心も無くなつて、涙も脆くなり、小兒心に返るものであります、故に年の老いた身でも病氣と失望に苦しんで居る時、殊に自分は他國の空にあつて、關ひ手も無く獨り淋しく、病の床に呻めく時などは、誰でも思ひ出すのは、幼い身を種々に看守つて、枕を直して下されたり、わが爲に愛撫を身に垂れ給ふた母親の慈悲であります、實に母親の子に對する愛情と言ふ者は、他のものゝ愛情に勝つて、長く續く者であつて、子が吾儘をしても心では叱る事はなく、子の爲には如何なる危險でも犯さうとしましたり、よしんば、我子が愚かな者であつても、母の慈悲は弱めらるゝ事はありません、亦子の不幸の爲に亂さるゝと言ふ事もありませぬ、子の便利の爲には、如何なる樂しみも犧牲にし、我子の名譽や榮華を共に喜び、若し不幸が子の身に襲ふても母の愛情は益々加はつて來ます、又子に恥辱が掛つても、猶可愛がり世間の人から、我子が捨てられたやうに、爪彈きせられても、猶母の心は同じで、嬉しいと、悲しいとを、共にして居るのであります。

此哀れな「ジョージ、ソーマース」も他鄕の空に居まして病にかゝり、誰も介抱する者なく、淋しく獄に繫がれて居た境遇の果敢なかつたを、つくゝ身にしみて覺えましたから、今は一瞬時たり

とも、母を枕邊に置いて其處から離す事を忍びませんでした、で、母親が立つと何地へ行くのだらうと力ない眼を見詰めて居るのを見て可愛想にと、母親はぢつと我子のすや〳〵と眠つて居るのを看病して居ると　時〻我子が何か夢に魘はれて、醒めて氣遣し相に、四周を見廻して母親が枕許に俯伏いて居る姿を　見ますと、子は母の手を自分の胸に當てゝ子供の樣に、すや〳〵と眠に就きました、こんな有樣で、あはれ此子の此世の息と言ふ者は絶えて到々死の神の手に導かれて天國に行きました。

私は此酸鼻の話を聞いて、すぐ此あはれな寡婦を尋ねて金錢を惠み、尙其心を慰めやうと思つたが、村の人が出來得る限り色々世話をして居ると言ふ事を聞いたから、その儘に控へて、入らぬ世話はしまいと思つた。

次の日曜日に、私は寺へ行つて見ると、思ひがけず、彼の老母が、ひよろ〳〵しながら、神壇の階の所に坐つて居るのを見ました。

見れば老母は喪服を着て居ました貧亡人の悲しさには、子を思ふ情は深くあつても、思ふまゝに粧ふ事は出來ませんでした、黑い「リボン」色の襟めた手巾其他こんな樣の者が二つ三つ、無限の悲を、僅な物で表さうと勤めて居たのが、見るから氣の毒でした、そこで私は富人の墓や、長文句の碑文や、物言はぬ大理石の石塔などを見まして、眞心を籠めて神壇の所に祈禱を捧げて居る、この哀れな老母の、生きた哀悼の樣子と言ふものが、眞の價値あるやうに思はれました。

私は、此話を、此寺に會集して居る富人に話し

ました所が皆心を動しました、そして、老母の生計や、苦悶を、助けやうと骨折つて呉れましたけれど、日曜日は一二度巡つて來る中に、彼の老母の姿は、此寺の何時も座る席には見えませんでした、聞けは老母は可愛らしい子の行つて居る天國をさして長い旅路に赴いたとの事で、これからは老母もいとしい友と再ひ別れる事の無い身となりましたのであります。

（完）

鐘馗の幟

秩溪生

三四才の小供が泣くと、『鐘馗様がにらめますよ……床の間を御覽』と嚇すをは、昔朝鮮の親達が、『鬼將軍來』をもち出したのと同じでありませう。前に嚇された覺えの有つた子でもありませうか。六つ七つに見えるのと、十ばかりのと二人、遊びに來て、『小父さん、彼の幟の鐘馗様は、何ういふ人』？、『何處の人』？、とやたらに尋ねますので、私は次の話をして聞かせた事であります。

昔々支那で唐といひました時、玄宗皇帝といふ天子様がありました。或る日、多くの兵隊を引連れ、大將方を指圖せられて、驪山といふ山の近所で、戰爭の演習をなされました、其の日は、合惡に薄暗い程曇つて、細かい雨が降りまして、餘程惡い天氣でありました。皇帝は演習がすむと、すぐ御乘物で御殿に御還りになりました、御還りにはなりましたが、其の時から何うも御氣分が宜くない、到頭煩ひ付かれまして、瘧といふ御病氣になつて、一日置きに熱が高くなりまして、其の時の御苦みといつては、一通りや二通りの事ではあ

りませんでした。或る日の事、大相御腦みの後すや〳〵と御眠になりました處が……虎の皮の犢鼻褌を着けた、一匹の小い赤鬼が飛び出て、片足に草履を穿き、片足は跣足で腰に其の草履が吊してある。團扇も一本搾してある、皇帝は、見ると自分が可愛がつて居る御后樣（楊貴妃）の香囊と、自分が大切にして置いた笛を盜み出して、廣い御殿を駈け回はり、皇帝の御前で戲けかへつて跳て居る。皇『こりや何物だ』鬼『魑魅といふが私です』

皇『虛耗、何だ其な物が』鬼『虛空を飛び行き人の物を盜るから、魑。人の嬉しい事を耗らし盡つて悲しがらせるから、魅。虛耗々々、魑魅です』

皇帝は火の樣な御立腹、誰か呼ばうとするより早く、一人の大男がぬつと現れた、頭には大きな破れ帽子を冠り、大きな身躰に綠の上衣、革帶をしめ長靴を穿いて居た。何うするかと見ると行きなり彼の赤鬼を引吊した、眼球を刳つた、到頭引裂いて仕舞つた。皇『やゐ其の方は何物だ』大男『はい私は終南山の進士で鐘馗と申す者であります』、と跪いた。皇帝『何で玆へ來た』？　鐘『私は官吏志願で、先年此都へ來て進士試驗を受けました、幾度受けても上れません、據所なく故鄕に歸りました。餘り口惜しく羞しいので、石に頭を叩き付けて死んだのであります。處が陛下の御恩命は實に特別であつて、此の上衣を下されて進士にもなされて官吏と同格に葬式までもして戴きました。其の御厚恩寸時も忘れは致しません、日夜奮勵して陛下の爲に、天下中の鬼共化物の類を根絕しにする覺悟であります』。と言つたと思ふと目が寤めて皇帝は汗びつしより。其れで瘧疾はすつかり癒

りましたとさ。

弟『ああ怖い人』　兄『怖い夢だつた』　兄弟『小父さん最早それだけなの』

ああ尙有りましたよ。皇帝は其れから早速吳道子といふ畫家を御召になりまして、夢の通に鐘馗をかけと仰付けられました。道子は一々御話を承り、謹で御受けをしまして、御前を引退り、筆を採つて紙に向ひますと、心持ちが恍然として來て其處に畫かうとする鐘馗があり〳〵と見えて來た其處で筆を走らせて立處に出來上つたすぐに、其れを上りました處が、皇帝は熟々御覽になつた。卓子を叩いて『汝も朕と同じ夢を見たの』？、と仰せられて大相御氣に入りで金貨百枚を下されたと申します。其の繪が實に彼の幟なんどの繪の御先祖なのであります。

弟『何うして幟に畫くんだらう』

魔物を退治るからです。

兄『魔除けだ〳〵』

あやめ草

根にあらはるゝ

今日こそは

いつかと待ちし

甲斐もありけれ

（東三條院）

◉雲の上

●皇后陛下の御養蠶　皇后陛下には例年御手づから養蠶に從事せさせ給ふ御事なるが、本年も昨今その事に勞かせ給ふ由、又各地とも本年は降霜のため桑の被害少からぬ申聞召され、香川太夫に仰あり被害の模樣内奏に及ぶべき旨、各地方官に御沙汰ありし由、承はる。

●東宮御巡遊　皇太子殿下には御見學の爲め愈よ去月廿日御出發相成りたるが順次左の各縣下御巡行あらせらるゝよし。

○群馬　○長野　○新潟　○福島　○山形　○巖手
○青森　○秋田　○宮城　○茨城

●皇太子妃殿下御着帶式　彌よ先月十五日御擧行相成れり、宮中にては午前九時賢所大前にて奉告祭を行はせられ、東宮御代拜丸尾侍從、妃殿下御代拜吉見女官の參拜あり、十時よりは東宮御所に九條公、及鷹司公夫妻、侍醫等參殿し吉例により鷹司公夫妻より妃殿下に御着帶を參らせ、御產婆之を受けて妃殿下の御身に着け奉つり、之にて御式濟み、皇太子殿下は更に表御殿に出御あらせられ參列の各員へ御祝酒を賜はりし由泄れ承はりぬ。

◉學事集會

●女子高等師範學校　附屬高等女學校は先月四日高等師範學校運動場に於て春期運動會を開きしが、同附屬小學校は十二日大久保にて運動會を開きたり▲十日には本校通學生一同大森八景園に遠

足會を催うしたりとの事▲廿八日地久節には午後六時より本校講堂に於て生徒一同の祝賀會を開き面白き餘興談話等ありて中々の盛會なりし由▲久しく本校國語科教授として碩學の譽高かりし三輪義方氏は客月十一日病氣の爲め遂に逝去せられたり誠に痛惜の至りといふべし。

●日本女子大學校　同校現下在學生徒數及府縣別は次表の如し。（五月十五日現在）

府縣	大學部	英文豫科	高等女學校	合計	府縣	大學部	英文豫科	高等女學校	合計
東京	三〇	六	一〇三	一三八	千葉	八	四	一〇	三二
京都	八	〇	七	一五	茨城	九	二	一五	二六
大阪	二	〇	八	一九	栃木	二	二	一〇	二四
神奈川	四	二	二	一七	奈良	三	一	一	五
兵庫	二	二	七	三	三重	四	〇	二	七
長崎	四	〇	四	八	愛知	八	〇	五	一三
新潟	二	二	六	九	靜岡	二	〇	三	三
埼玉	九	〇	一七	二六	山梨	一	〇	二	三
群馬	四	二	七	一五	滋賀	三	〇	三	六

岐阜	三	一	二	六	山口	二	〇	四	一五
宮城	八	〇	九	一七	德島	五	〇	三	八
長野	二	一	一六	一九	和歌山	三	一	三	七
福島	一〇	〇	一〇	二〇	香川	八	一	〇	九
岩手	八	二	七	一七	愛媛	一五	一	五	一九
青森	一	一	〇	二	高知	七	〇	四	二
山形	八	二	七	一七	福岡	九	〇	一三	二二
秋田	三	一	五	九	大分	四	〇	一	五
福井	四	〇	二	一五	佐賀	一三	二	二	一六
石川	三	一	三	七	熊本	一二	一	五	一八
富山	六	〇	六	一二	宮崎	四	〇	一	五
鳥取	〇	〇	一	一	鹿兒島	三	一	八	二
島根	一	二	〇	三	北海道	八	一	一七	二六
岡山	一〇	二	二	一四	合計	三六四	四五	三九八	八〇一
廣島	七	二	五	一四					

附記　沖繩縣は入學生なし

●華族女學校　先月十三日全校第十回運動會を全校内に開きしが、當日は皇后陛下御行啓あらせられ、始より終まで一々御叡覽あらせられしなり。

●第一高等女學校　は仝じく十八日、大森に遠足を試み、そこにて運動會を開きし由。

●高等女學校長會議の議決　過般來開會中なりし同會議に於ての議決事項左の如し。

一　教員欠勤の場合は講話復習練習等をなし教員出席の場合塡補を爲し長期欠勤の場合は學科目に應じ臨時教師雇入又は合級の教授を爲す事

一　作法を實際に適切ならしめんが爲め實物につき實習せしめ又は生徒實行を監視し來賓の接待送迎挨拶配膳給仕を爲さしむる事

一　學校と家庭との連絡を親密にせしめんが爲め父母懇話會を開き式日又は會合に父兄を招待し學校家庭の通信をなす事

一　教授上可成變休假名を廢する事

一　補習科に於て小學校教員たるの豫修を爲さしむるの不可なる事

一　修身の科中に於て操行點を付し又は別に操行點を定め之を進級の條件中に加ふるの不可なる事

一　高等女學校令施行規則二十五條中「修身」の下に「裁縫」を加ふる事及第同三十三條中「修身」の下に「國語、外國語」を加へ「地理」の下に「數學」を加ふる事並に高等女學校寄宿舍に於て廚房を設くるの規定を加ふる事、同上に作法の特別教室を加ふる事、同上施行規則は中學校令施行規則を準用せざる事

一　技藝專修科入學資格は高等小學校二ヶ年の課程を卒りたるもの以上に於て定むる事

一　高等女學校寄宿舍の構造は小規模と爲し一棟の人員を五十人以下とし之を二部に別つ事

●音樂會　先月四日には午後二時より小石川酒井邸に於て、明治音樂園遊會を開きしが、軍樂隊の演奏、歐洲管弦樂數曲、及狂言等數番あり、折柄の好天氣にて中々の盛會なりき▲同五日には午後六時より九段階行社にて千代田音樂會の催うしあり、當日第一の呼びものとなりしは、目下横濱なる獨乙婦人カイゼル孃の獨唱なりき▲仝十七日には午後二時より東京音樂學校に於て、岡山孤兒院慈善音樂會を催うせり、ケーベル、ユンケル、ハイドリッヒ、幸田、橘等音樂學校の諸名手の演

奏あり近來稀なる盛會なりし由▲因に記す　先月六日には、皇后陛下、特に音樂學校に御行啓あらせられ、同校生徒及職員の演奏を御聞きに相なられたる由。

●女子の友誌友會　第二回同會を先月十二日開花樓に開き、演舌、福引、寫眞撮影、大神樂、等ありて、中々の盛會なりし由。

●女子職業學校展覽會　共立女子職業學校にては豫記の如く過日午前八時より生徒試業の狀態、製作品の陳列販賣を爲せしが來會者は菊池文相をはじめ續々踵を接し裁縫、造花、編物、圖畫、刺繍の各教室を順次觀覽終て作品展覽場に入る順序にて此の場には各科通じて見るべきの品尠なからざりき。

●東京府教育品展覽會　先月十八日より本月三日まで上野公園第五號館内に開會卅日には畏くも皇后陛下の行啓を辱うせり、出品總數は二萬に餘り、其中小學校生徒の裁縫成績品最多數なりしが如し。日曜土曜は見物人中々の雜沓を極めたり。

筆の雫

●癩病患者百萬人　其節の最近調査に據れば全國各府縣下に於ける現在癩病患者の概數は凡そ四萬人餘の多きに達し、之が系統を有する人口は少くとも九十萬餘に上り居り、近年益增加の傾向を呈し、熊本縣下の清正公を祭れる祠の附近部落或は、東京府荏原郡の大井村の如き、全部落癩病患者のみにて、各府縣下孰れの地方にも斯る二三の小部落ありて其病毒を傳播せしめ居れるの現況なるより内務省衞生局に於ても今後相當の取締法を設くることに決し何れ中央衞生會議に諮問の上

發布する見込なりといふ。

●獨逸に於ける離婚と自殺との關係　普魯西に於ける離婚の結果に關する統計に據れば或る人數の內夫に別れ又は離婚せられたる女にして自殺を企てたるもの三百四十八人あり、之に對し現に人の妻たるものにして自殺を企てたるものは僅に六十一人に過ぎず、男子中には其比例之よりも大にして、妻に別れ又は離婚せられたる男子にして自殺を企てたるものは二千八百三十四人あるに對し有妻者にして自殺を企てたるものは二百八十六人に過ぎずと云ふ。

●目を休むる簡法　佛國の某著作家は近頃過度の書きのもゝ爲め目が疲勞して朦朧となりたる時極めて派手な色の絹布を暫く凝視すれば能く目を休め視力を回復し得ることを偶然發明し、數回實驗の上右の絹布をインキ壺に卷き附け置き、ペン尖にインキを附る毎に此絹布を見ることになしたりと云ふ。

●百歲の花婿、九十三歲の花嫁　去三月歐洲ポヘミアのオーベルポリッツに於て珍しき結婚ありたり、新郎のフランツ、ロスネルは百歲にして臨終の際褥に在り、九十三歲の新婦アンナ、レンヂルと結婚したるなり、此男女は七十五年間互ひに戀慕したる仲なりしが故障ありて今日まで結婚する能はざりしものにて結婚後四十八時間を經て新郎は死去したる由。

●印度のペスト　印度に於けるペスト病は目下頗る猖獗を極め居る由にて孟買領事より其筋への報告に依れば四月七日より同十五日に至る一週間印度全國に於けるペスト病死亡者數は二萬五千六

百五十五人にして、漸次其數を增加しつゝありと云ふ。

●米國大統領と日本の柔術　吾國の柔術が次第に外人間に傳へられつゝあることは世人の熟知せる所なるが、今や米國大統領ルーズヴエルト氏も吾柔術を學びつゝある人の一人に數へらるゝに至れり、氏は運動の爲に之を始めたる由なるが、其敎師は曾て長崎警察署の雇たりしオブライエンなり、同氏は我國に滯留中柔術を學び歸國後米人間に此術を擴むるに務め居れるなり、大統領は氏に就きて毎日二回柔術の稽古を受くるなりと云ふ。

●動物虐待問題　動物を虐待することが泰西諸國に於て如何なる程度まで罪惡として認めらるゝかを示すに好き一例は過般倫敦に於て一動物商人が金魚を虐待したる廉に依り、罰金二十圓を課せられ訴訟費用二十二圓を負擔せしめられたることなり、同人は多くの金魚を十三個の硝子鉢に入れて店の窓に吊したる儘イースターの祭日に店を閉ぢて旅行し、其間に許多の金魚の死し居たるを動物虐待禁止會員に見出されて告訴せられ、此處罰を受くるに至りたるなりと云ふ。尙去月中新嘉坡に於て動物の虐待したる廉に依り、罰金を課せられたるものゝ總額は、凡そ五百弗なりと云ふ。

●火山爆發の慘害　先月西印度島に於ける火山爆發の慘害に付きては、乞ふ次の電報に見よ。

●火塊散落全市破壞　（十日倫敦ルートル發）

マリチニヤの噴火山爆發の爲めサンピエール市は破壞されたり。佛國巡洋艦スシエルの指揮官は報じて曰く、五月八日の朝山の如き火塊ハードアー市に落下し同市全體を烏有に歸したり、此天災を

免れたるは同市人口二萬の內僅に三十名と商港のみなり、又セント、ドミニカ並にセント、ヴヰンセントに於ても火山爆發しつゝあり、西班牙及南部佛蘭西に於ては地震頻なり。

●サ市の慘狀餘聞（十三日同上發）

去日曜日に有志者サン、ピュールの荒趾を巡檢したるに、マルチニーク島は濃煙を以て蔽れ其近海には船舶の破片漂流し海鷗、鴛族は爭ふて水面に漂ふ慘死者死体を啄喰し居たり、又熱風寒風交る交る吹荒み、雨さへ降頻りたり、サン、ピエール市の火事は其時尙ほ燃えつゝありて上陸は甚だ困難なりき、市街は殆んど其趾を止めず、累々たる死体は多く其面を下向きにし横はり居たり。

嗚呼何等悲酸の報ぞ、米國議會は此報に接して即時に二十萬弗施與の件を議決して以て被害者救助の資に供せりといふ。

東京より

多忙に取り紛ぎれと申しては、相すみ申さず候へ共一回通信を怠り候罪は、偏へに御ゆるし下されたく候。さても雨勝ちなりし五月の月も打過ぎ候へばはや入梅の時期に近つき申候。只今の處、當地は何の眺めも之なく、紅深き岩躑躅や、ゆかりの色の藤の花も疾く、先月の半ば頃散り失せ候て、郊外見渡す限り、青葉のみの景色に候、たゞ此間に堀切りの菖蒲許り時を得顏に咲き誇り候も心憎き心地致され候御地の有樣はた如何に候や。

▲兎角に四月、五月といふ月は種々の會の有之候月にて中々賑やかに候。學校長會議などは既に新聞紙にて御承知の事と存候。東京府教育品展覽會

も、思ひの外繁昌致し候由にて、先月二十五日の日曜日には來觀者の數一万人に餘り候由に御座候

▲近來の出版界こそ可笑しく候樣覺し召さず候哉出るもの〳〵大低女とか戀とかに關係したるもの多きには呆れ申候。「戀の伊藤博文」とか、「愛しき妻」とか、「男と女」とか、「婦人の側面觀」とか、「女より見たる男」とか、其ほか「戀」とか「有美臭」とか、曰く何曰く何、よくも戀愛文學(?)の揃ひも揃つて出版せらるゝものに候はずや。之に依りて以て、當世の風潮は大低御推察相なり度候。或人小生の此種の文學を嘲笑致し候を咎めて、「さはいへ、ゲーテのエルテルス、ライデンは如何」と申され候へ共、エルテルス、ライデンを以て、當世の所謂戀愛文學に比較致され候ては、此大文豪定めて、地下に哭せらるゝ事と存じ候。

▲近頃の怪聞なりし高等女學校國語讀本問題も、一先づ落着致し候趣承知致し候、千葉縣高等女學校々長の今回休職に相なり候も、之が爲の由に候

▲讀賣新聞に連載せられし明治の令孃も、はや完結致し候。學德共に高き當世の女學校生徒女教師等を紹介致さるゝは無論宜しく候へども、左もなき人を餘りに賞め過ぎて候とか、令孃たちの親々から態々新聞社へ賴みに行きて候とか、何とか乎とかと、口善惡なき京童は申し傳へ居りし事に御座候。

▲追々夏休みに近つき候に付いては、又々講修會のいろ〳〵廣告有之候、來月にも相なり候はゞ取り纏め御覽に入れ可申候。先は之にて擱筆仕るべく向暑の折柄折角御自重專一に存じ候　草々

●北海道廳立高等女學校長　同學校長は札幌女子高等小學校長たりし小林到氏任命せられたり、月俸金六十五圓。

●奥羽六縣北海道聯合教育大會　同會は來る六月六日より三日間、札幌區北海道教育會に於て開會の由にて目下準備中にあり。

●夏季講習會講師　本年函館教育協會に於て開會すべき講習會講師には、各科教授法を現任女子高等師範學校教授槇山榮次氏に、倫理科を東都藤井文學士に、法制科を秋保法學士に何れも決定せる由、因に記す北海道教育會倫理科講師は井上哲次郎氏なりと、本道講習會の盛運こそ大なりと謂ふべし。

●東亞文書院の入學生　本道よりの入學生には師範卒業の秋永勝、中學卒業の鈴木淳、幷に犬飼大助の三名なり。

●婦人協會北海道支部の例會　去る四月十二日午后一時より札幌女子高等小學校にて例會を開けり、炭鑛會社大島六郎及師範學校教諭熱田氏の講話などありたり。

●北海の花信　春風漸く暖く、黄鳥既に花信を報ずるも梅花未た笑を呈せず、四月卅日雪の一片二片落ち降るも、眞に北海の名に背かず、因に記す本道の花候梅桃櫻杏など同時期に咲きて妙なり。（五月中旬北海道通信生）

會報

幹事會　五月二十二日午後二時より女子高等師範學校附屬幼稚園に於て開會、第二十五常會を來六月七日午後一時三十分より女子高等師範學校附屬幼稚園に於て開會のことを決議す。

入會

東京の部

女子高等師範學校　平野みよ

地方の部

栃木縣足利町大日大門前　岩下なほ
靜岡縣濱松幼稚園　近藤しげ
新潟縣新潟市旭町通一番町　木村りう
三河國西加茂郡筋生村大字黑笹　加納貞子
信濃國西筑摩郡大桑村　西尾田鶴

自三十五年四月廿五日至仝五月十八日會費領收

一金壹圓二拾錢　自三十四年四月至三十五年三月　樋口みれ
一金五拾錢　自三十五年五月至三十五年九月　西浦りつ
一金六拾錢　自三十四年十月至三十五年三月　加藤萬代
一金六拾錢　自三十四年十三年十月　星野きく
一金五拾錢　自三十五年二月至三十五年六月　鈴木れい
一金壹圓　自三十五年六月至三十六年一月　間人たれ
一金壹圓　自三十六年一月至三十六年八月　中村まつ
一金五拾錢　自三十六年九月至三十六年九月　近藤しげ
一金壹圓　自三十六年十月至三十六年十一月　佐藤ゆき
一金壹圓二拾錢　自三十六年十一月至三十六年四月　鹽野吉兵衛
一金四拾七錢　自三十六年五月至三十六年五月　石島廣
一金壹圓　自三十六年六月至三十六年二月　恒川三枝
一金壹圓　自三十六年三月至三十六年四月　奥山はる
一金五拾錢　自三十六年五月至三十六年八月　小柳ゆき
一金拾錢　三十五年十一月　渡邊すみ
一金拾錢　三十五年四月　藤岡さき
一金拾錢　三十五年五月　小林ふゞ
一金拾錢　三十五年五月　宮崎もと
一金拾錢　三十五年五月　山田せん
一金拾錢　三十五年四月　根來まさよ
一金拾錢　三十五年五月　相川みれ
一金拾錢　三十五年五月　岩田ゆき
一金拾錢　三十五年五月　富田八千代
一金拾錢　三十五年五月　内田たれ

一金拾錢　三十五年五月　木村寅惠
一金拾錢　三十五年五月　高木なみ
一金拾錢　三十五年四月　安東てい
一金拾錢　三十五年六月　村井あい
一金拾錢　三十五年五月　赤江よれ
一金二拾錢　自三十五年十一月至三十五年十二月　重松あや子
一金壹圓二拾錢　自三十五年一月至三十五年十二月　西尾田鶴
一金壹圓拾錢　自三十五年二月至三十五年十二月　淺井馨
一金壹圓拾錢　自三十五年二月至三十五年十二月　永地待枝
一金五拾錢　自三十五年五月至三十五年九月　山中下枝
一金拾錢　三十五年五月　近水とし
一金二拾錢　自三十五年五月至三十五年六月　加納貞子
一金壹圓二拾錢　自三十五年一月至三十五年十二月　澤村きみね
一金七拾錢　自三十五年十二月至三十六年十二月　河崎きを

正誤

前號掲載

一金六拾錢　自三十四年十月至三十五年三月　淺岡はまハ淺岡はまノ誤
一金六拾錢　自三十五年四月至三十五年九月

謹告!!!

本誌號を重ぬるに從ひ、益記事を精選し体裁を整へて本誌の改良を計らんと欲す。次號に於て既に定まれる記事左の如し。

日常の作法……香園女史
津崎矩子(完結)……下村三四吉
眼の話……本郷生
鐵道の話……菊亭
遊戯の方針……町田則文
國學と荷田東滿……米溪
人生の比喩……小嶋松之助
いろは料理……石井泰次郎
母と子と繼母……林壽祐
米國に於ける我二人の女學生……や　て、
結婚論……野本生
お寺參りの婦人と子ども……凸凹生

其他子供欄の話は、愈出でゝ愈面白し。夏は漸く來らんとす。清流綠樹の邊り、希くは聊か消夏の友たるに足らんかな。

フレーベル會規則

第一條　本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條　本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク

第三條　會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ

第四條　會員ハ本會ノ經費トシテ一ケ月金拾錢ヲ醵出スベシ

第五條　令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ稗益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ

第六條　本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ

一　總會　毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育參考品幼兒成績物展覽會、會務ノ報告、幹事ノ選擧等ヲナス

會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ

一　常會　毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス

一　組合會　會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織ス

但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス

一　雜誌發行　毎月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス

一　前項ノ外本會ノ目的ニ稗益アリト認メタル事件

第七條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長　一人　會務ヲ總理ス

主幹　一人　會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス

幹事　十人　會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス

評議員　若干人　重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス

第八條　會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス

第九條　主幹ハ會長ノ特選トス

第十條　幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二ケ年トス

但シ毎年半數ヲ改選スルモノトス

第十一條　評議員ハ會長ノ特選トス

第十二條　本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルヽコトアルベシ

第十三條　此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレハ變更スルコトヲ得ス

謹告

各地方の通信は續々御投稿を願ひ候。

元稿は總べて十五日までに御送附下されたく、但し子ども欄へ掲載致すべき分は挾繪の都合も之有り候につき毎月十日までに御送附下されたく候

投稿は開き封ならば大低二錢切手貼用にて宜しく候

此廣告に依り御注文の御方は婦人と子供を見たる旨御附記を乞ふ

毎月二回(五月廿日)發行

高し絶卓然超に中誌雜學女の多數今方
賴信の湖江でし献貢に道斯く長實誠尚
るす期其しな者く若に鑑女事るせ博を
民國るな誠忠ひ養を女士るな淑貞は處
りあにるむしらた母慈の

婦道鑑 女鑑

美の文栞の

材料豐富 趣味津々

第貳百五拾參號(五月廿日)の目次大要を見よ

◎矢島星嘉悅三刀自肖像○東京第一高等女學校卒業生及びナイヤガラの眞景◎
◎女子に高等女學校以上の教育の必要なきか……篠田女子高等師範學校教授◎
◎女學校の學制について……天野法學士◎
◎まことの母……敕僕生○近古勇婦百譚……黑金子◎
◎グリセル、ベーレー夫人宮舘さだ子○家庭改良意見……機部武雄五郎◎
◎禮節心得草……大谷喜代子○產所式……有住常子◎
◎たいどころ…石井湧太郎○ナイアガラの大瀑……永濱生◎
◎閑窓茶話……YT散人○大和めぐり……井上頼文◎
◎花がたみ……白松園主人○あなば……藤の舍◎
◎朧夜…小畑いく子○歌小桃源記……清水橘村◎
◎村岡勤王談……黑猿○長歌新体詩數首◎
◎短歌數十首…東久世伯外諸名家◎
◎歌文數百の讀者◎
◎內報外報數十件◎
◎落樂籠……讀者◎
◎口繪の說明◎
◎表裝は◎
◎美◎

定價
●一册金拾錢●
●六册(三ヶ月分)五拾七錢●
●拾貳册(半ヶ年分)壹圓拾錢●
●廿四册(一年)貳圓拾錢郵稅不要●

發行所 東京築地二丁目 株式會社 國光社出版部

此廣告に依り御注文の方は婦人と子供を見たる旨御附記を乞ふ

女子夏期講習會

會員募集

本年夏期休暇を利用し女子の爲に講習會を開く希望の者は速かに申込まるべし

學科と講師

一教育學	女子高等師範學校助教授	東基吉君	
一各科教授法	女子高等師範學校助教授	東基吉君	
一日本歴史	日本女子大學校講師	岡部精一君	文學士
一西洋歴史	在大學院（西洋史專攻）	本多淺次郎君	文學士
一社會倫理	哲學館講師	野田義夫君	文學士
一心理學	女子高等師範學校教授	雀部顯宜君	文學士
一和歌變遷史及和歌作法	哲學館講師	尾上八郎君	文學士

會場　（追テ通知ス）

期日　八月一日ヨリ十日間（各科毎日二時宛）

講習料　一科金壹圓五十錢二科兼修金貳圓五十錢

申込　七月十五日迄入會ノ時金五十錢（講習料ノ内）ヲ添フベシ

規則　詳細ノ〻ハ規則書ニアリ郵券二錢ヲ送ラレヨ

會員募集

東京麹町區富士見町五丁目二十番地

大日本教育會

此廣告に依り御注文の方は婦人と子供を見たる旨御附記を乞ふ

主任 石井泰次郎君

料理講義錄

會員募集

明治三十五年六月開始○修業期間 前期一ケ年、後期一ケ年○入會金 三拾錢○會費 一ケ月前金貳拾錢、三ケ月前金五拾五錢、六ケ月前金壹圓十錢、一ケ年前金貳圓拾五錢、郵券代用は一割增の事、猶委曲は會則一覽すべし

○會員へは毎月一回發行の本講義錄を配布すべし

◎會則

入用の向は二錢郵券を添へて申込まは直ちに郵送すべし

口繪

◎前期第壹號

六月五日發行

理科大學人類學教室藏 世界食事風俗 其一

◎宮內省御厨子所預 高橋宗一

直朝臣

◎日清戰役御凱旋日 御臺調進圖

◎集古會員實地演習 鎌倉時代料理

文本

日用惣菜◎交際料理◎茶事懷石◎儀式料理◎諸菜切方◎食品吟味◎支那料理◎西洋料理◎食堂心得◎雜錄

東京京橋區鈴木町拾壹番地

大日本割烹學會

(婦人と子ども第二卷第六號)
明治三十五年六月五日發行(毎月一回五日發行)

明治三十四年二月六日内務省許可
明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可

◉洋琴 金參百圓以上貳千圓迄各種

◉ウイオリン 鈴木製金五圓以上五拾圓迄各種 舶來品金八圓以上百五拾圓迄各種

◉手風琴

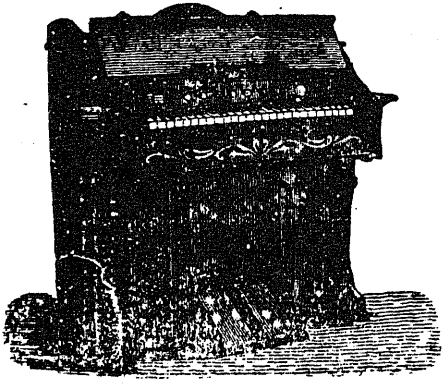
保險附

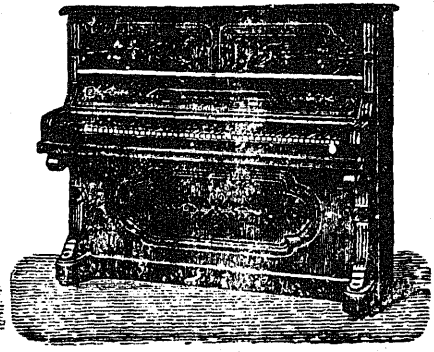
山葉風琴

一號形 定價金參拾圓
二號形 定價金廿六圓五拾錢
三號形 定價金參拾六圓迄各種
四號形 定價金參拾七圓
五號形 定價金四拾五圓
六號形 定價金四拾八圓
七號形 定價金六拾五圓
八號形 定價金七拾五圓
九號形 定價金百拾圓
十號形 定價金百五拾圓
十一號形 定價金百貳拾圓
新式場用形 定價金四拾五圓
メーソンモデル第一號 定價金百參拾圓
全第二號 定價金百五十圓
全第三號 定價金貳百圓

(荷造費を要す)

◉右の外兩用風琴、吹奏琴ハーモニカ、フラジョーレット其他各樂器幷に和洋音樂書各樂器附屬品各種





新刊廣告

◉中學唱歌 東京音樂學校編纂 袖裝全一冊定價金三洋珍十五錢郵稅四錢

◉重音唱歌集 洋裝第一集第二集 小山作之助編 山田源一郎編 定價金五拾錢 郵稅不要

◉女學唱歌 洋裝第一集第二集 共益商社編 定價金五拾錢 郵稅不要

◉幼稚園唱歌 洋裝美本 共益商社編 全一冊に定價金四拾錢郵稅不要

◉オルガン教則本 洋裝大形美本 島崎赤太郎編 一之卷定價金三拾五錢 二之卷定價金五拾錢 三之卷近刊 郵稅六錢 郵稅八錢

◉新遊戲 音樂適用 洋裝美本全一冊 鈴木米次郎編 石原重雄著 定價金三拾錢 郵稅不要

◉小學唱歌教授法 新撰 洋裝美本全一冊 北村成於作譜 定價金三拾五錢 郵稅不要

◉勸進帳 長唄樂譜第一編 鈴木米次郎編 全一冊 定價金壹圓 郵稅不要

◉舞踏案内附舞踏曲 洋裝美本全一冊定價金七拾五錢 郵稅不要

◯ヒヤノ、オルガン調律修繕 郵券二錢御送附

◯目錄進呈

東京市京橋區竹川町十三番地 共益商社樂器店
(電信略號ヨキ)
(電話新橋五百廿九番)